

花園町遺跡調査会発掘調査報告書第1集

# 花園町 No.50 遺跡

1987

埼玉県大里郡花園町遺跡調査会

花園町遺跡調査会発掘調査報告書第1集

## 花園町 No.50 遺跡

一般県道菅谷一寄居線橋梁整備事業  
(花園橋)に伴う埋蔵文化財発掘調査

1987

花園町遺跡調査会

## 序

花園町は、東京から70km圏にあり、緑深き秩父山地を直近に見、荒川の流れを聞くことができる農村地帯であります。ところが、近年の近代モータリゼーションの発達と共に変化をきたしてきました。それは、関東地方と新潟県地方を結ぶ関越自動車道の完全開通や国道140号線バイパスの建設といったものに現わされており、年を追って自然環境、生活環境も変化しております。これらの開発事象に伴って、埋蔵文化財への対応もその必要が増大してまいりました。当町管内においても、関越自動車道花園インターチェンジの建設に伴う「台耕地遺跡」の発掘調査や、国道140号線バイパス建設に伴う「宮林・上南原・下南原・小前田古墳群」の各遺路の発掘調査が既に実施されております。

本書は、当町荒川地内にかかる花園橋の架替工事に伴う取付道路部分の事前の記録保存のための発掘調査報告書であります。

この調査にあたりましては、埼玉県土木部道路建設課、埼玉県熊谷土木事務所、埼玉県教育局指導部文化財保護課及び関係各機関の方々、地元関係者各位のご指導・ご協力を賜わり、厚くお礼を申し上げる次第であります。

花園町遺跡調査会  
会長 新井朝次

## 例　　言

1. 本書は、昭和60年10月15日から同年12月25日にかけて実施した埼玉県大里郡花園町大字荒川字下川原393番地の1の外に所在する花園町No.50遺跡の発掘調査報告書である。(文化庁通知番号委保第5の1459号)
2. 花園町のNo.50遺跡の発掘調査は、一般県道菅谷一寄居線橋梁架替工事に伴い、同事業に先立ち行われた記録保存のための緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は、埼玉県の委託を受けて花園町遺跡調査会が実施した。  
発掘調査組織は下記のとおりである。

### 花園町遺跡調査会組織

会長	新井 朝次	花園町教育委員会教育長
副会長	荒木 又一	花園町教育委員会教育次長
専門員	森下昌市郎	花園町教育委員会社会教育係主事
庶務	横川 均	花園町教育委員会社会教育係長
〃	石田カヅ子	花園町教育委員会学務係長
監事	須藤 哲男	花園町助役
〃	坂本 正雄	花園町議会事務局長

4. 発掘調査参加者  
沼尻義一、衣袋忠一、佐藤美代、沼尻しも、沼尻蓉子、中村さだ、矢田やす、中村はな子、高荷静江、根岸カヨ、神田静江、田辺雪子、田辺ユメ、持田ひで、河田治江、大沢孝子、大沢 静、持田とよ、清水文子、清水みつ江、小林 級
5. 本書の執筆、編集は森下昌市郎が行い、図版の作成等は小林芳江、栗原久枝、関根由利子、高橋和子が行った。

6. 発掘調査により出土した遺物・造構図等は花園町教育委員会で保管し、教育資料として活用している。

7. 発掘調査、出土品整理から本書の作成にあたり、下記の機関、方々より貴重なご指導、ご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

埼玉県土木部道路建設課、埼玉県熊谷土木事務所、埼玉県教育局指導部文化財保護課、埼玉県立歴史資料館、田辺 安、町田 墓、金井慶之、島村範久、島村秀之、高木義和

8. 本報告書中の敬称は全て略させていただいた。

## 目 次

序  
例 言  
目 次  
挿図目次  
表 目 次  
図版目次

<b>第Ⅰ章 調査の契機と概要</b>	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
(1) 調査方法	1
(2) 発掘調査日誌	2
<b>第Ⅱ章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境</b>	6
<b>第Ⅲ章 遺跡の概要</b>	8
第1節 遺跡の概観	8
第2節 土層堆積状況	8
<b>第Ⅳ章 遺構と出土遺物</b>	12
(1) 第1号住居跡	12
(2) 第1~7号土壙	12
(3) 第1・2号溝状遺構	16
(4) 第1号井戸跡	16
(5) 包含層出土の遺物	27

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	第11図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (2)
第2図 土層堆積図	第12図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (3)
第3図 遺跡全測図	第13図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (4)
第4図 第1号住居跡実測図	第14図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (5)
第5図 第1号住居跡出土遺物実測図	第15図 包含層出土遺物実測図 (1)
第6図 第1~7号土壙実測図	第16図 包含層出土遺物実測図 (2)
第7図 第1・2号溝状遺構実測図	第17図 包含層出土遺物実測図 (3)
第8図 土壙・溝状遺構出土遺物実測図	第18図 包含層出土遺物実測図 (4)
第9図 第1号井戸跡実測図	第19図 包含層出土遺物実測図 (5)
第10図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (1)	第20図 包含層出土遺物実測図 (6)

第21図	包含層出土遺物実測図	(7)	第25図	包含層出土遺物実測図	(11)
第22図	包含層出土遺物実測図	(8)	第26図	包含層出土遺物実測図	(12)
第23図	包含層出土遺物実測図	(9)	第27図	包含層出土遺物実測図	(13)
第24図	包含層出土遺物実測図	(10)	第28図	包含層出土遺物実測図	(14)

## 表 目 次

第1表 発掘調査参加者数

第2表 周辺の遺跡地名表

## 図 版 目 次

図版1	遺跡航空写真（昭和30年撮影）	図版17	第1号井戸跡遺構確認状況
図版2	表土剥ぎ作業状況	図版18	第1号井戸跡断面堆積状況
図版3	調査区全景	図版19	第1号井戸跡完掘状況
図版4	調査区北側の調査状況	図版20	第1号住居跡調査風景
図版5	土層断面状況（C—3区）	図版21	発掘調査風景
図版6	第1号住居跡完掘状況（東方より）	図版22	発掘調査風景
図版7	第1号住居跡完掘状況（西方より）	図版23	調査地点の宝筐印塔
図版8	第1号土壤完掘状況	図版24	土壤・溝状遺構出土遺物
図版9	第2号土壤完掘状況	図版25	第1号井戸跡出土遺物
図版10	第3号土壤完掘状況	図版26	第1号井戸跡出土遺物
図版11	第4号土壤完掘状況	図版27	第1号井戸跡出土遺物
図版12	第5号土壤完掘状況	図版28	包含層出土遺物
図版13	第6号土壤完掘状況	図版29	包含層出土遺物
図版14	第7号土壤完掘状況	図版30	包含層出土遺物
図版15	第1号溝状遺構完掘状況	図版31	包含層出土遺物
図版16	第2号溝状遺構完掘状況	図版32	包含層出土遺物

# 第Ⅰ章 調査の契機と概要

## 第1節 調査に至るまでの経過

昭和60年3月に、埼玉県熊谷土木事務所より花園町教育委員会に県道音谷一寄居線の荒川にかかる花園橋の橋梁架替工事に伴い、その沿線における埋蔵文化財包蔵地の有無の確認についての照会があった。町教育委員会では、県文化財保護課とも協議の上、県立歴史資料館に依頼して現地踏査を実施する事に決定した。同年4月5日に県立歴史資料館職員及び町教育委員会職員により現地踏査を行なった所、路線予定地内に土師器片、須恵器片が散見され、また隣接地に存在する中世の宝篋印塔二基が、以前路線内にあった井戸より出土したと伝えられており、古墳時代ー中世の遺構・遺物の存在も伺えた。そのため、道路建設にあたっては事前の記録保存の発掘調査が必要と判断して、関係方面に連絡した。その後、工事主体である県道路建設課、熊谷土木事務所、県文化財保護課及び町教育委員会による協議を重ね、工事着手前に発掘調査を実施する事に決定した。

花園町教育委員会では、発掘調査主体として花園町遺跡調査会が適当であるとして工事主体者に推薦した。

花園町遺跡調査会では、9月21日に同発掘調査の受託を決定し、順次調査の準備にとりかかり、10月13日付で発掘調査委託契約を締結し、同月15日より現地での発掘調査を開始し、調査は12月25日まで実施した。

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 調査方法

今回発掘調査を実施したのは、花園町大字荒川字下川原393番地の1外の幅約10m長さ約200mの道路予定地部分である。調査対象地面積は約2,800m<sup>2</sup>であり、路線は緩やかにカーブしている。調査前の現地の状態は北側が宅地跡、南側が畠地であった。

調査方法としては、対象地全体に8mピッチで方眼杭を設定して遺構の実測、全測等の基準とした。方眼杭の軸方位は路線方向と同一方向にあわせたため、N—8°—Wである。この方眼杭に囲まれた8m四方の区域を一調査単位とし、西から東にA—Dを冠し、南から北にアラビア数字1—18を付して「A—1区」の様に呼称した。また、北方の現県道沿いの路側部の調査については、原則的に2m×2mの調査杭を2mピッチで設定し遺構の確認を行ったが、現地の状況により必ずしもこれによらなかった。

表土の削去については、遺物が含まれない表土層（層厚約20cm）を重機により削去し、それより下層についてはすべて人力により調査を行った。調査は基本として旧河床面又は第Ⅲ層黒褐色土層下位面を検出した段階での遺物の出土が止まった時点で終了とした。

出土遺物は、遺構内、グリッド内出土を問わず平面位置と標高を記録した上で取り上げた。

## (2) 発掘調査日誌

10月15日～10月20日

現地調査事務所の設営、調査器材の搬入等事前準備作業

10月21日 晴れ

本日より作業員を投入して実質的調査を開始する。調査区設定作業、北方の県道側の調査坑の調査にはいる。

10月22日 曇り

北方の県道側の調査坑の調査

10月23日 晴れ

北方の県道側の調査坑の調査、水準点移動作業、B・C—3～5区の調査、土層観察用トレーナーの調査

10月24日 晴れ

C—5～9区の調査、1/100全測図作成作業

10月25日 晴れ

C・D—6～8区の調査、1/100全測図作成作業

10月26日 晴れ時々曇り

C・D—5～7区の調査

10月28日 曇り

C・D—5～7区の調査

10月29日 曇り時々雨

土層観察トレーナー及び包含層の調査

10月31日 曇り

包含層の調査、遺構確認作業

11月1日 雨

雨天のため現場作業中止。事務所内で図面整理作業を実施する。

11月5日 晴れ

遺構確認作業、鍵り方設定作業、土層断面図作成作業

11月6日 雨

雨天のため現場作業中止

11月7日 雨

雨天のため現場作業中止

11月8日 晴れ

土層断面図作成作業、C・D—6・7区の遺物平面図作成作業及び遺物取上げ作業、調査区設定作業

11月9日 晴れ

C・D—5・6区遺物平面図作成作業及び遺物取上げ作業、第1号住居跡、第1号土坑の調査に

着手、遺構の写真撮影

11月11日 晴れ

包含層の調査作業、C・D-5~7区の遺物平面分布図の作成作業、第1~3土坑の調査及び図面作成作業

11月12日 晴れ

第1~3号土坑の図面作成作業、同写真撮影、包含層の調査作業

11月15日 晴れ

第1~6号土坑の調査、C・D-3~5区の遺物平面分布の作成作業

11月16日 晴れ

第1~6号土坑図面作成作業、C・D-4・5区遺物平面分布図の作成作業

11月18日 晴れ

遺構写真撮影、C・D-3・4区よりさらに下層の包含層の調査

11月19日 晴れ

包含層の調査作業を続行する。

11月20日 曇り

C・D-3~12区までの全測図の作成作業、C・D-12区以降の調査区での遺構確認作業、第2号構の調査作業

11月21日 晴れ

第2号構の調査作業、C-16・17、D-13・14区の遺物平面分布図の作成

11月25日 晴れ

C・D-13~17区までの包含層の調査作業、第1号住居跡の調査作業

11月26日 晴れ

C・D-11・12区の包含層の調査作業、第1号住居跡の調査作業

11月27日 晴れ

C・D-12・13区の包含層の調査作業、第1号住居跡の調査作業

11月28日 曇り時々晴れ

C-13区の包含層の調査、本日同グリッドで井戸跡と思われる落込みを確認する。第1号井戸跡と命名する。

11月29日 晴れ時々曇り

C・D-14・15区の包含層の調査作業、陶器片の出土が多い。

11月30日 晴れ

C・D-14・15区の包含層の調査続行

12月3日 晴れ

C・D-14・15区の包含層の調査

12月4日 晴れ

C・D-14・15区の包含層の調査

12月 5日 晴れ  
C・D—14・15区の包含層の調査続行

12月 6日 晴れ  
第1号住居跡写真撮影、第1号井戸跡図面作成作業、C・D—11～13区までの遺物平面分布図作成作業

12月 7日 雨  
雨天のため現場作業中止、図面整理作業

12月 9日  
第2号溝の図面作成作業、同写真撮影、第1号井戸跡の調査作業

12月11日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業

12月12日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業

12月13日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業

12月14日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業、本日で底と思われる部分に到達する。

12月16日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業、合せて土層断面図作成作業

12月17日 晴れ  
第1号井戸跡図面作成作業、C・D—14区の包含層調査作業

12月18日 晴れ  
第1号井戸跡の調査作業、本日で完掘する。

12月19日 晴れ  
第1号井戸跡図面作成作業、同写真撮影、C—14・15区の包含層調査作業

12月20日 晴れ  
調査区内の片付け作業

12月21日 晴れ  
調査器材の清掃、整備及び搬出作業

12月24日 晴れ  
器材、出土の搬出作業

12月25日 晴れ  
ガス、水道、電話等の撤去。本日で発掘調査の全てを終了する。

第1表 発掘参加者数

日	10	11	12	日	10	11	12
1	—	1.0	—	16	1.0	16.5	—
2	—	—	—	17	1.0	—	16.5
3	—	—	17.0	18	1.0	19.0	15.5
4	—	—	16.0	19	1.0	10.5	20.0
5	—	17.0	15.5	20	—	17.5	18.0
6	—	—	15.5	21	21.0	17.0	19.0
7	—	—	1.0	20	16.5	—	—
8	—	19.5	—	23	18.5	—	2.0
9	—	13.0	18.0	24	19.0	—	2.0
10	—	—	15.0	25	19.5	19.0	2.0
11	—	17.5	14.5	26	16.5	20.0	—
12	—	16.0	15.0	27	—	16.0	—
13	—	5.0	18.5	28	18.5	16.5	—
14	—	—	17.0	29	18.0	17.0	—
15	1.0	14.0	—	30	17.5	18.5	—
				31	17.5	—	—
				小計	187.5	290	275
				合計		752.5	

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

本遺跡は、埼玉県内を貫流する荒川が、秩父山地から関東平野に流れ出て作りだした広大な扇状地地形の扇尖部付近、現在の荒川の流れによって開拓された河岸段丘の第二段目上に位置している。

遺跡を乗せる扇状地地形は、現在の荒川流域によって北の柳挽台地、南の江南台地に大きく分けられている。

遺跡の行政上の位置は、埼玉県大里郡花園町大字荒川地内に所在している。遺跡の西北西約2kmには秩父鉄道小前田駅、北東へ500mには、東京と新潟を結ぶ大動脈である関越自動車道花園インターチェンジが位置する。

本遺跡を含め、荒川の両岸周辺には数多くの遺跡が存在している。それらのうち主なものを第1図「周辺の遺跡」と第1表「遺跡地名表」に示した。遺跡周辺にも大遺跡が多く、東には古墳時代後期の古墳群である「黒田古墳群」、縄文時代中期の集落跡、平安時代の製鉄工場及び集落跡である「台耕地遺跡」が所在する等、多くの重要な遺跡が存在する環境であったと言える。

中世になると、鉢形城主北条氏邦に仕えた武士団である、持田四郎左衛門以下の「荒川衆」の本拠地でもあり、当時の荒川郷から現在に至っている。

第2表 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代・時期	遺跡・遺物
1	立ヶ瀬古墳群	寄居町大字立ヶ瀬	古墳時代後期	
2	小前田古墳群	花園町大字小前田	古墳時代後期	埴輪
3	橋屋遺跡	花園町大字小前田字橋屋	縄文時代後期	安行、土偶
4	小園古墳群	寄居町大字小園	古墳時代後期	
5	No.50遺跡	花園町大字荒川字下川原	古墳時代前期、江戸	
6	黒田古墳群	花園町大字黒田	古墳時代後期	鉄刀、刀子、鐵族、埴輪
7	上南原遺跡	花園町大字黒田	縄文時代前期、平安	住居跡12軒、諸磯
8	台耕地遺跡	花園町大字黒田	縄文前・中期、平安	住居跡76軒、古墳2基
9	下南原遺跡	花園町大字黒田字北原	縄文時代中期	住居跡1軒、加曾利E
10	宮林遺跡	花園町大字永田字台山	縄文草、早、前、中	住居跡7軒
11	箱崎古墳群	川本町大字畠山字箱崎	古墳時代後期	刀子、耳環、玉類

第1回 周辺の道路



## 第Ⅲ章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の概観

本遺跡は、花園町大字荒川地内に所在し、以前より「花園町No.50遺跡」として周知されている遺跡である。遺跡の総面積は約56,000m<sup>2</sup>で、そのうち今回発掘調査の対象面積は約2,800m<sup>2</sup>である。今回の調査は、大字荒川字下川原393番地の1外の地点で実施された。

調査区の標高は70~76mを測り、荒川をのぞむ河岸段丘の第二段目から一段目にかけて段丘に直交する形で行われ、全体として北から南へ傾斜している。

調査区内からは、古墳時代前期の住居跡1軒、時期不明の土壙7基、時期不明の溝状遺構2基、江戸時代と思われる井戸跡1基の遺構が検出され、縄文時代~近世までに至る遺物が検出されている。

### 第2節 土層堆積状況

本遺跡における土層堆積は、荒川の河岸段丘上に位置し、荒川の影響を多く受けている。第3図は本遺跡の基本的な土層堆積図である。いずれも調査区の縁に沿って南北方向に、つまり段丘に直交する形で設定している。土層の性質は下記のとおりであるが、全体の堆積としてA~D~1~9区までと、A~D~11区以北A~D~16区から始まる段丘崖までの間では堆積に違いが認められる。1~9区までの一段目の段丘面下部では、荒川に向って緩やかに北から南に傾斜する堆積状況を示すが、11区以北ではそれとはまったく逆に、北の二段目の段丘に向って傾斜し、堆積している。更に高位の段丘に近づく程、土質の粘性が強くなり有機臭を持つようになる。これは、この地点に旧流路又は湧水による流路、沼沢が形成されていた可能性を示すものではないだろうか。遺物の出土も、11区以北では流れ込みの様相を呈している。

以下各層の土層説明を記す。

第I層：褐色土層： 所謂耕作土である。粘性は弱く、粒子は密である。混入物として多量の粘土（？）粒子を含む。

第II層：茶褐色砂質土層： 粘性は弱く、砂粒を含む。しまりは悪い。本層上位~中位面にかけてが遺構確認面である。

第III層：褐色粘質土層： II層とIII層の中間的な土層である。層中に径5~10mmの小礫を含む。

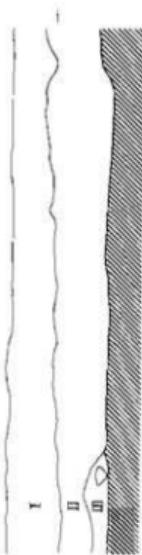
第IV層：黒褐色粘質土層： 色調は暗く、粘性は強い。粒子はやや疎である。層中には径2~50mmの礫を含む。11区以北では含水量が多く、有機臭がする。遺物包含層である。

第V層：灰褐色砂質土層： 砂粒を多く含む。しまりは悪い。粘性は弱い。色調はIII層に比して大部明るい。

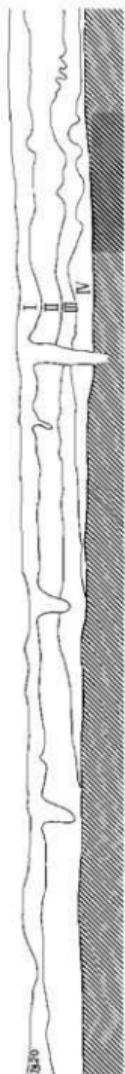
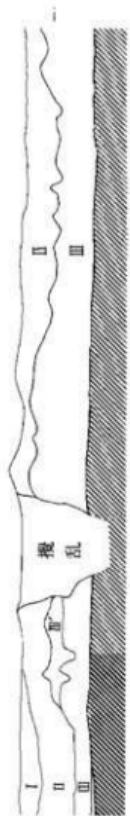
0 2

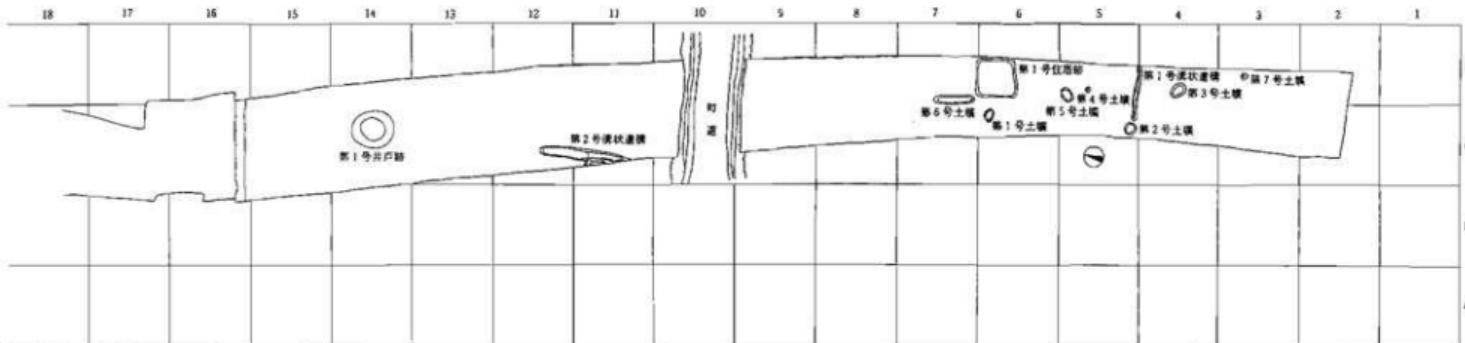
第2圖 土層地質圖

C-13·14區



C-2·3·4區





第3図 沿 海 公 国

## 第Ⅳ章 遺構と出土遺物

### (1) 第1号住居跡 (第4図、図版6・7)

D-6区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。平面形態は概ね方形で、主軸方位はN-15°-Wである。規模は東西3.75m、南北3.8m、確認面から床面までの深さは0.28~0.30mである。壁の立ち上りは緩やかである。柱穴は5本確認され、典型的な4本柱穴のパターンを示すが、いずれも床面から25cm前後の掘り込みを持つ。床面は軟弱であり、所々に小礫が露出している。

覆土は3層に分層され、以下の通りであった。

第1層：黒色土層： 所謂耕作土である。部分的にしか存在せず、ウネ状に残るのみである。粒子は細かく、粘性は弱い。

第2層：茶褐色砂質土層： 本住居跡の主体となる覆土である。粘性は弱く、砂粒を混入する。粒子はやや粗い。

第3層：灰褐色砂質土層： 2層に較べ砂粒の混入が多くなり、色調も暗くなる。径10~30mm前後的小礫を所々に含む。

燃焼施設は、住居跡ほぼ中央に設けられた地床炉である。規模は、長軸0.85m、短軸0.6m、深さ0.14mを測り、主軸方向は概ね北を示す。覆土は褐色土が主体であったが、焼土・炭化物の堆積はほとんど認められなかった。炉壁も軟弱である。

#### ・出土遺物 (第5図)

1は、須恵器の甕の底部破片である。推定復元により、底径は約18cmを測る。底部は糸切り後にヘラナデによる整形が施され、外面は指頭による整形、内面は横位のナデ整形が施されている。器厚10~13mm、焼成は良好である。2は、土師質小皿の小破片である。磨滅が著しく、底部を含めた内外面の整形はうかがえないのである。明褐色の色調、器厚5mmで焼成はやや軟調である。3、4は共に鉄製品である。いずれも錆の付着が著しい。そのため、地金の形状から用途を推定するのは困難であるが、4は先端を尖らせた釘様の物と思われる。重量は3が15g、4が20gを量る。

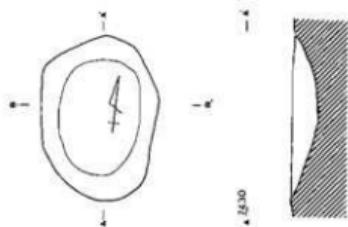
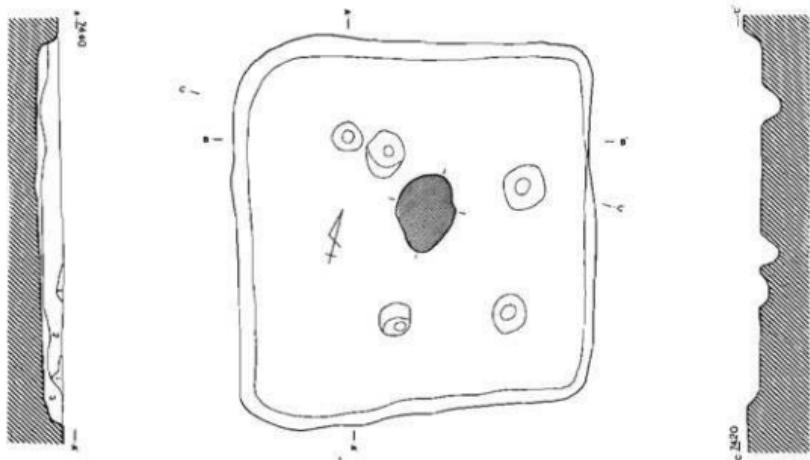
### (2) 第1~7号土壤 (第8図、図版8~14)

#### ・第1号土壤 (第8図1)

C-6区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸1.45m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。平面形態は不整梢円形を呈する。主軸方位はN-60°-Eを示し、断面形態はU字状である。覆土は3層に分層され、下記に示す通りである。

第1層：黒褐色砂質土層： 粒子は細かく、粘性は弱い。わずかに砂粒を含む。

第2層：灰褐色砂質土層： 1層に較べ砂粒の混入量が多く、色調も白っぽくなる。粘性は弱い。



第4図 第1号住居跡実測図

第3層：褐色砂質土層： 1層と2層の中間的な色調を示す。砂粒の混入は一番多く、粘性は弱く粒子は粗い。

・第2号土壤（第8図2）

C-5区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸1.3m、短軸1.15m、深さ0.12~0.22mを測る。平面形態は円形を呈する。主軸方位はN-10°-Wを示し、断面形態は浅いU字状を呈する。覆土は、黒褐色砂質土層の単一堆積である。

・第3号土壤（第8図3）

D-4区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸1.5m、短軸1.45m、深さ0.1mを測り、平面形態は不整円形である。主軸方位はN-15°-Wを示し、断面形態は浅いU字状を呈する。覆土は、黒褐色砂質土層の単一堆積である。

・第4号土壤（第8図4）

D-5区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸0.55m、短軸0.49m、深さ0.26mを測り、平面形態はほぼ円形を呈する。主軸方位はN-5°-Wを示し、断面形態はコの字状を呈する。覆土は、黒褐色砂質土層の単一堆積である。

・第5号土壤（第8図5）

D-5区より検出された。遺構確認面は、Ⅱ層上位面である。規模は、長軸1.7m、短軸1.2m、深さ0.13mを測り、平面形態は梢円形を呈する。主軸方位はN-86°-Eを示し、断面形態は浅いU字状を呈する。覆土は黒褐色砂質土層の単一堆積である。

・第6号土壤（第8図6）

D-7区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸4.0m、短軸0.95m、深さ0.30~0.35mを測る。平面形態は、長梢円形を示す。主軸方位はN-10°-Wを示し、断面形態はコの字状を呈する。覆土は2層に分層され、以下の通りである。

第1層：黒褐色砂質土層： 砂粒をわずかに含む。粒子は細かく、粘性は弱い。

第2層：灰褐色砂質土層： 1層に較べ、砂粒の混入量が多い。色調はそのためかやや明るく、粘性は弱く、粒子は粗い。

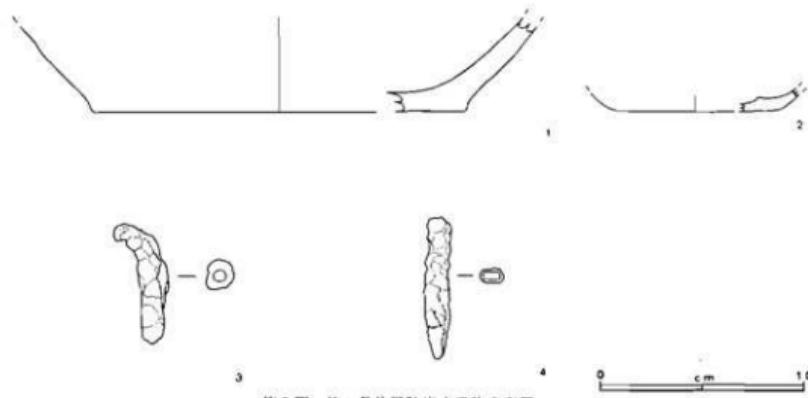
・第7号土壤（第8図7）

D-3区より検出された。遺構確認面はⅡ層上位面である。規模は、長軸・短軸ともに0.6m、深さ0.15mを測り、円形の平面形態を示す。主軸方位はN-3°-Eで、ほぼ北を指す。断面形態はU字状を呈する。覆土は、黒褐色砂質土層の単一堆積で、覆土中に扁平な礫が埋置されていた。

・出土遺物（第7図、図版24）

○第2号土壤（1・2）

1は、須恵器の片口の口縁部破片である。推定口径29cmを測る。内外面共に、横位に丁寧な整形が施される。片口部は、内面からの押圧と、内面の削りにより作出されている。明灰褐色の色調、混入物は少なく、焼成は良好である。2は皿の底部破片である。底部は糸切りで、胎土は小砾の混入があり難である。内面と外面腰部まで草色の透明度の高い釉がかけられる。全体に貫入が発達し、



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

内面には重ね焼の目痕が残る。全体として粗雑な作りである。

(3) 第1～2号溝状遺構 (第6図、図版15・16)

○第1号溝状遺構

D—4・5区からC—5区にかけて検出された。確認面はII層上位面である。溝の走向は概ね東西方向に走り、その規模は、長さ5.5m以上、幅0.45～0.6m、深さ0.10～0.15mを測る。溝の断面形態は浅いU字状を呈する。覆土は土壤と近似しており、黒褐色砂質土層の単一堆積である。この溝の用途、性格は不明である。

○第2号溝状遺構

C—11・12区にかけて検出された。確認面はII層上位～中位面にかけてである。溝の走向はほぼ南北方向である。溝は南から北にかけて段差を持ち、緩やかに傾斜がかかる。規模は長さ8.0m以上、幅1.0～1.2m、深さを0.3m測る。断面形態はU字状を呈する。覆土は黒褐色土層の単一堆積である。

•出土遺物 (第7図3～6、図版25)

○第1号溝状遺構 (3～6)

3は打製石斧である。片側に自然面を大きく残した縦長の剥片を加工し、分銅型に仕上げている。刃部は分厚く、簡単な調整剝離が加えられているのみで、ほぼ剥片端部の自然線を利用している。もう一方の端部は欠損している。材質は砂岩で、100gを量る。4は縄文時代中期加曾E式の深鉢形土器の胴部破片である。器面には右傾して、原体L Rの縄文が密に施文され、その後に竹管状工具による二条の沈線により文様が描かれる。器厚は15mmを測り、厚手で混入物として砂粒を含む。内面は滑沢で、焼成は良好である。5は凹み石と思われる。扁平な自然縁の片面に2カ所の凹部が認められる。下部は人為か自然か判然としないが欠損している。材質は砂岩で585gを量る。

#### (4) 第1号井戸跡 (第9図、図版17~19)

C-13区より検出した。遺構確認面はII層上位面である。規模は、長軸4.5m、短軸4.4m、確認面よりの深さ2.4m以上を測る。平面形態はほぼ円形のプランを示す。壁は下部に行くに従い、径が細く、より垂直に近くなり、上部に行くほど緩やかになる。まわりの土質が砂粒を多く含み、崩落の危険があったため調査は半蔵状態で行い、底も2.4mで水が湧きはじめた為に中止した。遺構内の覆土は人為的に埋められた状況を示し、内壁は石積であったと思われるが、これも破壊されている。部分的に残った石積の痕跡から本来の井戸の直径は約1.2~1.5mを測ると思われる。付近での聞き込み調査によると、明治の初め頃にこの井戸の中より宝篋印塔が出土したとの言であるが、それに類する遺物は検出されず、井戸自体も近世の所産として大過ないと思われる。

#### ・出土遺物 (第10~14図、図版26~28)

##### (1) 中世の遺物

第1号井戸跡より出土した遺物の中で、中世の遺物として確認できるものは少ない。これは、第1号井戸跡自体が江戸時代の所産であり、遺物が流れ込みであることによるものであろう。

##### 須恵質鉢 (第10図1・2)

1・2共に須恵質の鉢と思われる平底の底部破片である。1は、粗雑な作りで、胎土中に小石を含む。底部はヘラ削り整形である。内面は滑沢である。底径10.0cm、残存高4.0cm、器厚10mmを測る。焼成は良好である。2は、平底の底部に半円形の脚部が1個貼付されている。脚部の単位数は不明であるが、貼付後に入念な調整が施される。内外面共に横位の整形痕が残り、外面はタキ目の工具痕が下部に残る。底径18.3cm、残存高2.4cm、器厚8mmを測る。焼成は良好である。

##### 土師質小皿 (第10図3)

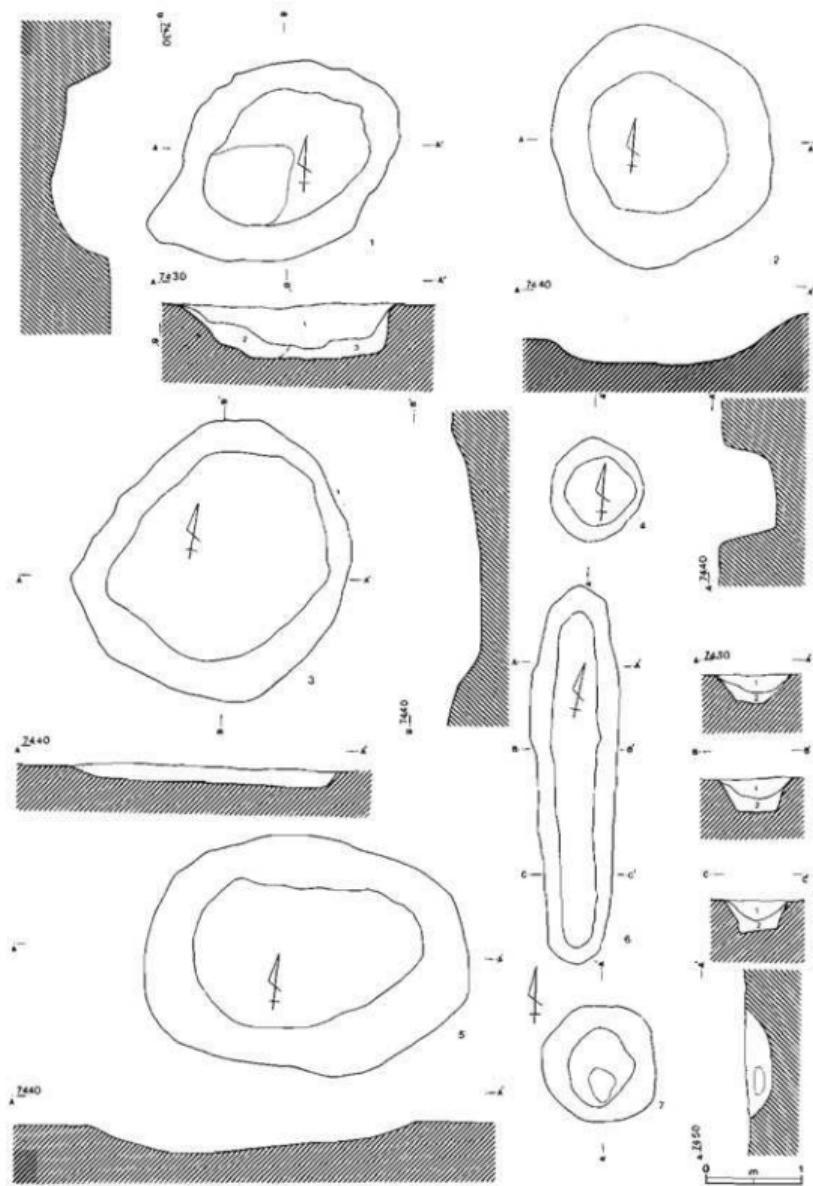
所謂かわらけである。内外面共相当磨滅している。胎土は比較的ち密で、明褐色の色調を示す。内面に煤の付着が認められる。口径9.8cm、高さ2.0cm、器厚4mmを測る。

##### (2) 近世の遺物

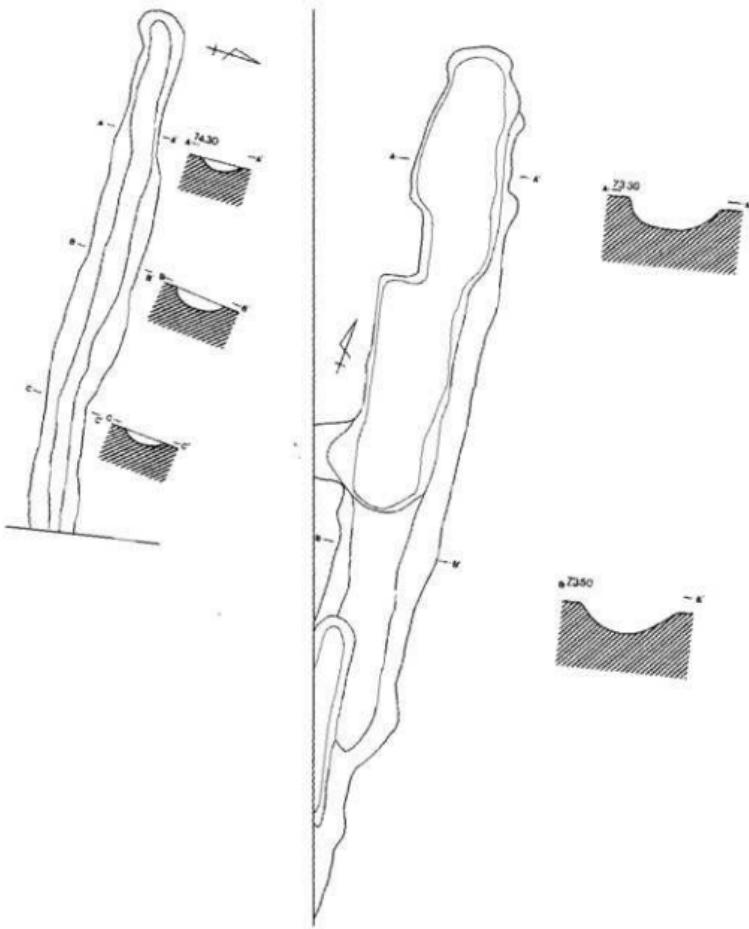
第1号井戸跡の覆土中より出土した遺物は、ほとんどが近世に比定できる。

##### 皿 (第10図4~9)

4は、橈輪整形で底部は削り込み高台、器内面に灰釉が施釉される。貫入が発達し目痕(3カ所)が残る。口縁部外縁に煤の付着が認められる。口径10.2cm、器高2.0cm、器厚4mmを測る。焼成は良好である。5は橈輪整形の後に削り整形が施される。器内面及び外縁部に灰釉が分厚くかけられる。内面には目痕(5カ所)が残る。口径9.6cm、器高2.1cm、器厚4mmを測り、焼成は良好である。6は、橈輪整形、削り込み高台である。器内面に黄褐色の透明度の高い釉がかけられる。細かい貫入が入る。口径8.8cm、器高1.8cm、器厚3mmを測り、薄手の作りである。7は橈輪整形、口縁部の破片である。内面に灰釉が施釉される。口径11.2cm、残存高1.9cm、器厚3mmを測り、薄手の作りであるが、焼成は良好でち密である。8は、橈輪整形、口縁部の破片である。内面及び口縁部外縁に透明度の高い灰釉が施される。いささか強引に復元実測している。口径9.7cm、器高2.0cm、器厚4mmを測る。9は、底部から口縁部付近までの3分の1周破片である。橈輪整形、削り込み高台で



第6図 第1~7号土壤実測図



第7图 第1·2号溝状遺構実測図

ある。器内面には透明度の高い灰釉が施釉され、細かい貫入が入る。底径4.0cm、残存高2.1cm、器厚4mmを測る。

#### 灯明皿（第10図10～14）

10は、輪轂整形、削り込み高台を持つ。いささか強引に復元した。外面は全面に煤の付着が認められる。内面には灰釉が施され、貫入が発達している。推定口径9.0cm、器高1.9cm、器厚4mmを測る。11は輪轂整形、削り込み高台である。内面及び口縁部外縁部に透明度の高い黄褐色釉が分厚く施される。油溜に切られた火口台は後から削られたものでやや不整である。口径11.0cm、器高1.6cm、器厚4mmを測る。12は、輪轂整形、削り込み高台を持つ。内面には灰釉が施され、全体に細かな貫入が発達している。口径10.6cm、器高2.1cm、器厚4mmを測る。13は、輪轂整形、削り込み高台を持つ。内面及び口縁部外縁に透明度の高い灰釉を分厚く施釉している。全体に貫入がよく発達している。外縁部には部分的に煤の付着が認められる。内面の油溜の火口台の凹みはやや幅広である。口径10.7cm、器高2.1cm、器厚4mmを測る。14は、輪轂整形、削り込み高台を持ち内面には灰釉が施される。油溜を中心とした小破片である。推定口径10.1cm、器高2.0cm、器厚4mmを測る。

#### 天目茶碗（第10図15）

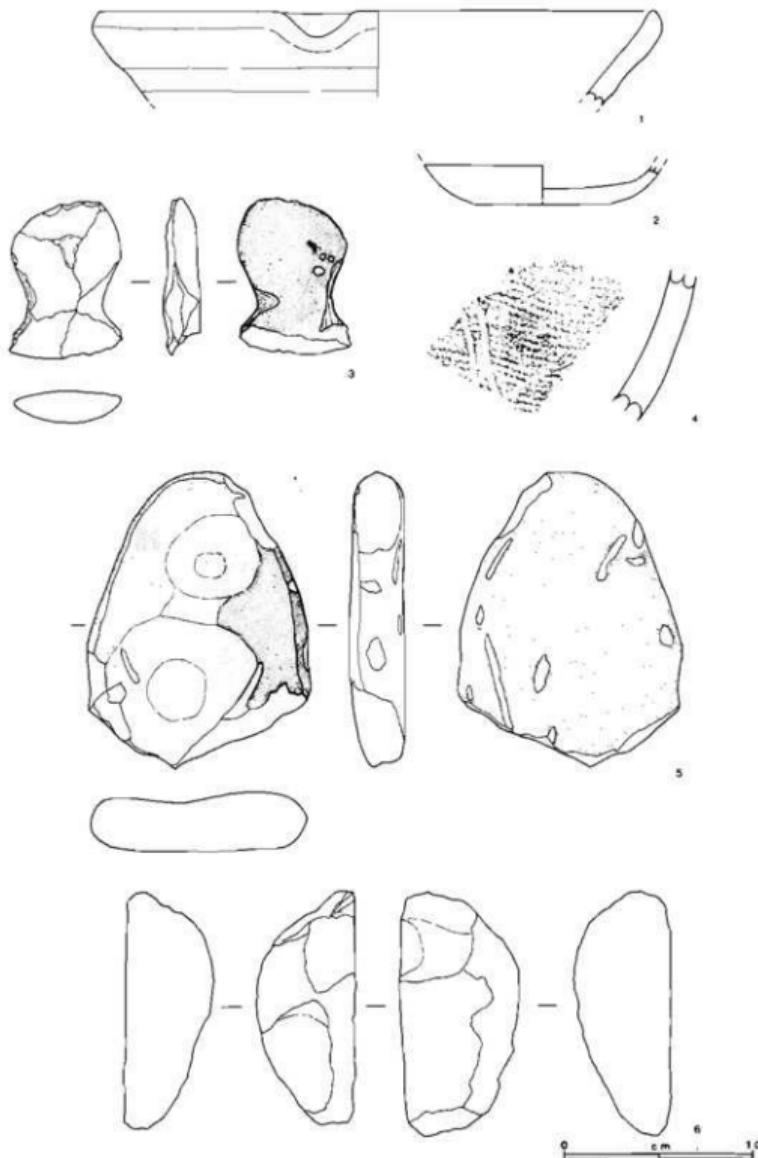
高台部から腰部までの破片である。体部は輪轂水挽き整形が施され、高台は削り出し高台である。内面には鉄釉が施される。胎土中に白色微石粒を多量に含む。底径5.0cm、残存高2.4cm、器厚7mmを測る。

#### 碗（第10図16～19、第11図1～4・6）

16は、比較的大きな高台部を持った碗の底部破片である。輪轂整形、削り出し高台で肉厚である。内面に濃緑色釉で花文が描かれ、全面に淡い草色の透明度の高い釉が施される。底径5.7cm、残存高2.2cm、器厚5mmを測る。ち密な胎土で焼成は良好である。17は高台部から緩やかに立ち上る。飯茶碗であろう。輪轂整形、削り出し高台である。手書きで腰部及び高台の内外面に藍色、草色の釉で線引きを施し、全面に上薬をかけている。底径5.0cm、残存高4.4cm、器厚4mmを測る。瀬戸と思われる。18は厚手の茶碗の底部破片である。輪轂整形は粗雑である。削り出し高台を持つ。外面腰部と高台に藍色で手書き染付後に上薬が施される。透明度は高くない。底径3.3cm、残存高2.7cm、器厚5mmを測る。19は高台部の破片である。大振り厚手の茶碗であろう。水挽き輪轂整形、削り出し高台である。内面に淡青色の釉が施される。底径4.5cm、残存高3.7cmを測る。第11図1は、淡青色で草花文が描かれ、その上に透明度の高い灰釉が分厚くかけられる。内面には砂粒の浮き出しが認められ、粗雑な作りである。口径9.1cm、器高7.1cm、器厚4mmを測る。2は、瀬戸の飯茶碗であろう。藍色釉で単純化された草花文が描かれる。口径10.0cm、残存高3.9cm、器厚5mmを測る。3も藍色釉で草花文が描かれる。口径10.0cm、残存高5.2cm、器厚5mmを測る。4は、小振りの茶碗である。器面には向い合う羊齒状文が描かれ、透明度の高い上薬がかけられる。焼成も良好である。口径7.3cm、器高5.6cm、器厚4mmを測る。6は、碗の底部破片である。内面に五弁花文が蓝色で描かれる。底径4.1cm、残存高2.2cmを測る。

#### 盃（第10図20）

20は、小振りの盃である。赤絵で、外面に羽子板が描かれ、上薬がかけられている。胎土もち密



第8図 土壌・溝状遺構出土遺物実測図

で、焼成も良好である。口径5.2cm、器高2.5cm、器厚3mmを測る。

#### 鉢（第11図5）

楕円形、高い削り出し高台を持つ。器壁は腰部から緩やかに立ち上り、口縁部は朝顔形に外反する。外面には牡丹文、内面底部には梅花文が描かれる。口径13.5cm、器高6.7cm、器厚4mmを測る。

#### 壺（第10図21・22、第11図8、第14図1・2）

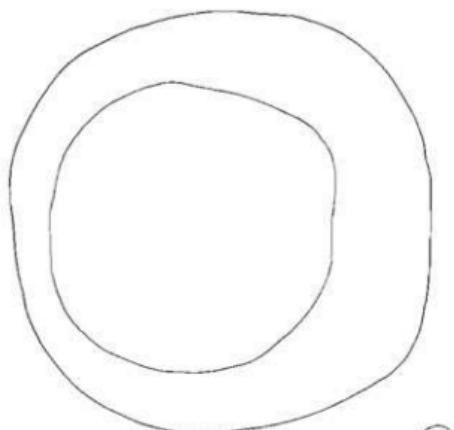
21は、口径25.8cmを測る壺の口縁部破片である。楕円形後、外面は刷毛ナデ、内面は指頭による整形が施される。薄く灰釉がかかるが、素焼に近い。22は、小破片であるが、全面に草色の釉が施釉される。器面は粗雑で、砂粒が浮き出している。貫入が認められる。口径20.6cm、残存高5.1cm、器厚7mmを測る。第11図8は、全面に濃茶褐色の鉄釉がかかる。口径15.4cm、残存高4.0cm、器厚6mmを測る。第14図1・2共に壺の底部のみの破片である。1は楕円形、削り高台であるが、内外面に透明度の高い草色釉が施され、細かな貫入が発達している。底径10.0cm、残存高2.2cm、器厚10mmを測る。2も楕円形、削り出し高台である。内面に黄褐色釉が分厚くかけられる。器面には貫入が認められる。底径7.8cm、残存高2.9cm、器厚6mmを測る。

#### 壺（第11図7）

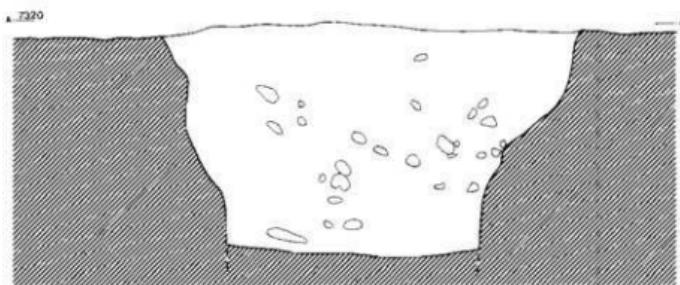
小型の耳付壺である。楕円形痕が内面に残り、茶褐色の鉄釉が外面及び頸部まで施される。耳は貼付で、単位は4個と思われる。口径10.0cm、残存高5.1cm、器厚5mmを測る。

#### 内耳土器（焙烙）（第12図1～8）

総数で8点の出土である。いずれも井戸跡内の覆土中より出土した。1は、やや浅目である。橙褐色の色調を呈する。横方向の整形痕が残る。やや強引に復元している。内面に内耳の痕跡あり。推定口径32.0cm、器高2.7cm、器厚9mmを測る。2もやや浅目である。1に較べ底部がやや丸味を帯びる。橙褐色の色調で、底部には煤の付着が認められる。内耳は、口縁部内端より付けられている。推定口径51.0cm、器高3.2cm、器厚10mmを測る。3は、やや大形の破片である。橙褐色の色調を呈し、横方向の整形痕が残る。底部に煤付着。内耳の痕跡あり。内耳の幅は約30mmである。推定口径45.0cm、器高3.6cm、器厚10mmを測る。4は、小型の破片であるがやや強引に復元している。内外面共に横方向の整形痕が残り、底部には煤の付着が認められる。橙褐色の色調を呈する。推定口径47.0cm、器高2.7cm、器厚9mmを測る。5は、明褐色の色調を呈する。口縁部外縁下に幅10mm程の沈線が施される。推定口径42.7cm、残存高3.7cm、器厚9mmを測る。6は、黒褐色の色調を呈する。3分の1周程の大型破片である。外面全体に煤の付着が認められ、内外面に横位の整形痕が残る。推定口径37.2cm、器高5.1cm、器厚10mmを測る。7は、底部から口縁部付近までの破片である。褐色の色調を呈する。外面には煤が付着している。粘土帯の接合痕が内外面に残る。推定底径43.0cm、残存高5.0cm、器厚9mmを測る。8は通常の内耳土器とは趣きが異なるが、器面の荒れ等から、同様の使用をされてきたものであることは推察される。明褐色の色調を呈し、底面は煤の付着が認められる。底部周縁に脚部の様なものが付いていたのか、剥離痕が残っている。内外面共に横位の整形痕が残り、内耳の代りに径10mm程の小穴が穿たれている。口径23.7cm、器高3.9cm、器厚13mmを測る。



013 | 014  
013 | 014



0 m 2

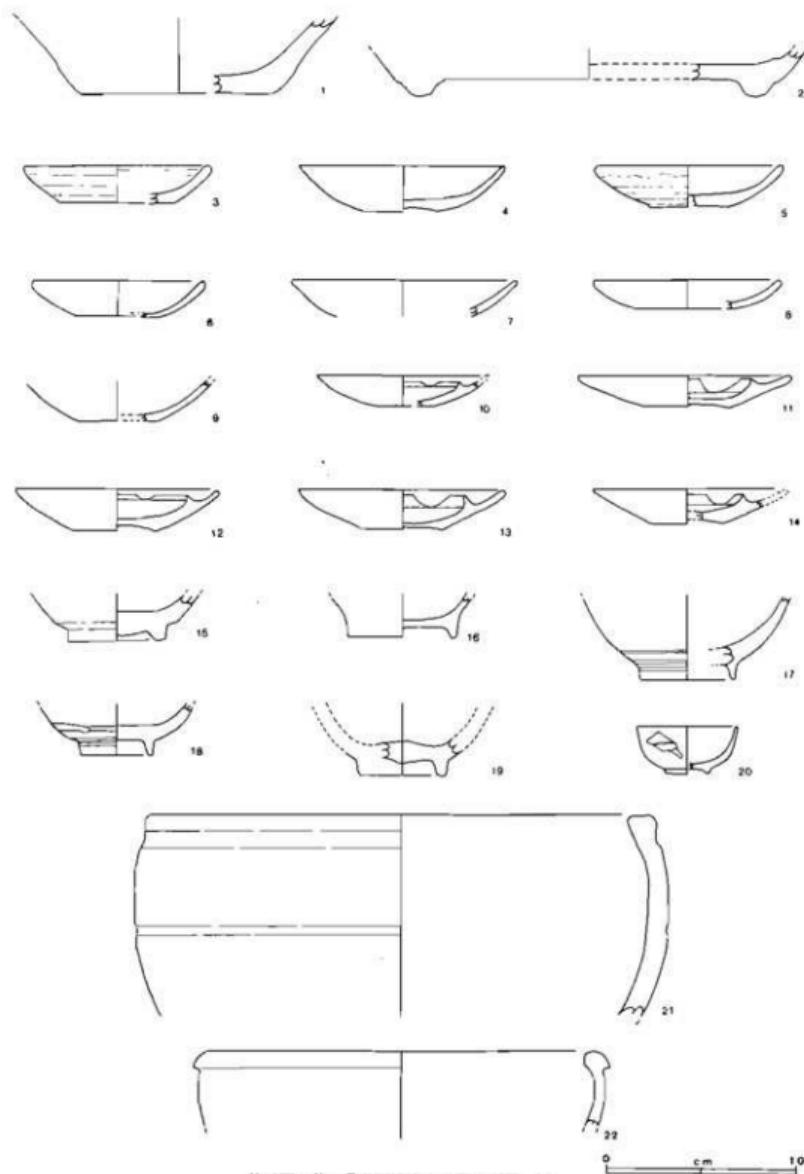
第9図 第1号井戸跡実測図

瓦（第14図3）

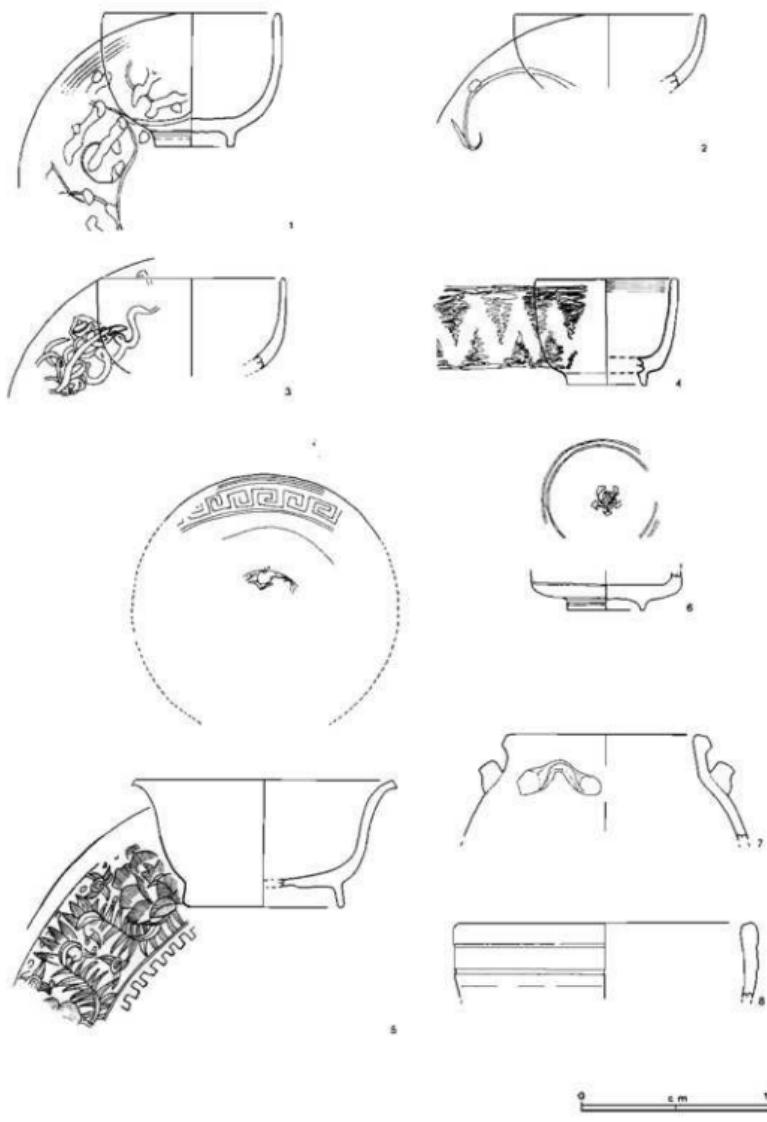
平瓦の破片である。両面共良く整形され、焼成も良好である。焼した灰褐色の色調を呈する。長さ9.8cm、幅7.5cm、厚さ2.0cmを測る。

その他の遺物（第13図）

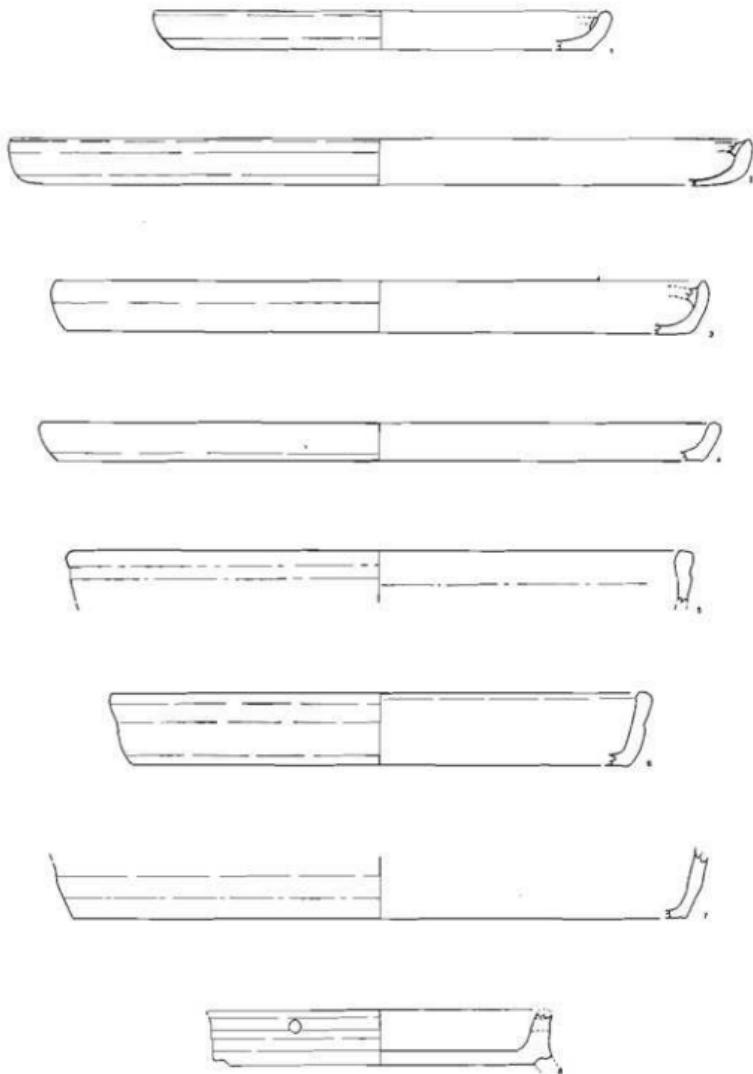
用途性格不明の土製品である。橙褐色の色調を呈し、器面には全体に煤が付着している。全面に丁寧な調整が施される。推定外径40.0cm、内径33.0cm程の輪状になると思われる。上部には二段の棱を持ち、断面U字状の溝が巡る。



第10図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (1)



第11図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (2)



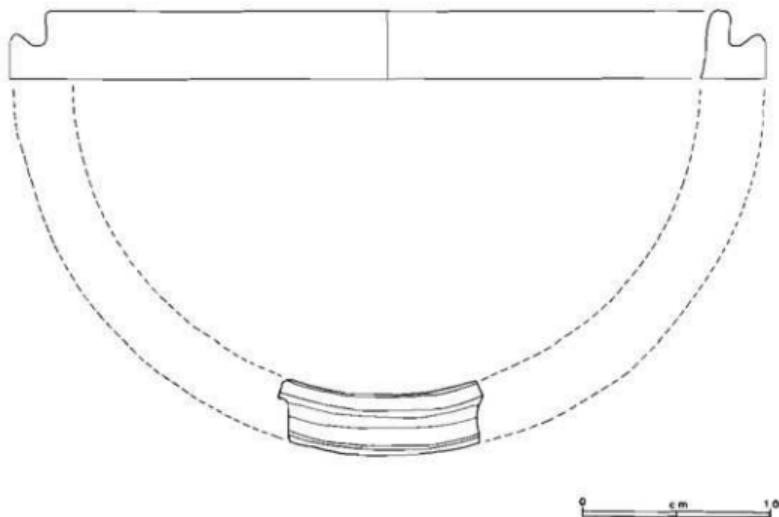
第12図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (3)

— 26 —

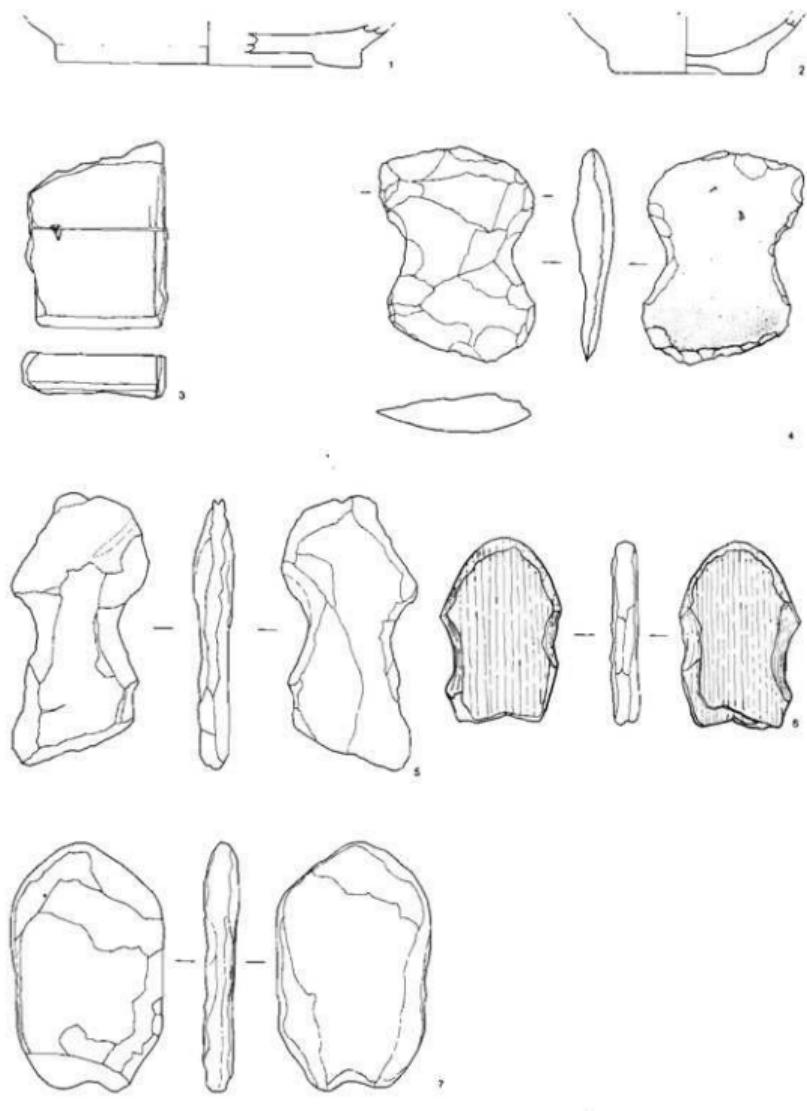
(5) 包含層出土の遺物 (第15~28図、図版29~32)

土師質小皿 (第15図1~8)

1~8は、いずれも所謂かわらけと称されるものである。1は、口径9.0cm、器高2.0cmを測る。器面は輪轂整形の後、化粧粘土がかけられている。底部には糸切痕が残る。明褐色の色調で胎土中に黒色砂粒をわずかに含む。内面は煤けている。C-15区Ⅲ層より出土した。2は、口径10.0cm、器高2.0cmを測る。輪轂整形で、底部は回転糸切りである。明褐色の色調を呈し、混入物は少なく胎土はち密で焼成も良好である。内面と口縁部外縁部付近に煤の付着が認められる。灯明皿としての利用か。C-15区Ⅰ層より出土した。3は、口径約9.0cm、器高2.0cmを測る。輪轂整形後に化粧粘土がかけられる。底部は糸切り。明褐色の色調を呈し、内面には煤の付着が認められる。C-15区Ⅲ層より出土した。4は、口径9.0cm、器高2.2cmを測る。輪轂整形、底部糸切りである。明褐色の色調を呈し、胎土はち密で砂粒若干を含む。内面には煤の付着が認められる。D-15区Ⅲ層より出土。5は、口径9.7cm、器高2.0cmを測る。輪轂整形の後、化粧粘土が薄くかけられる。底部は糸切り。褐色の色調を呈する。胎土はち密、焼成は良好である。C-15区Ⅱ層より出土した。6は、口径10.0cm、器高2.1cmを測る。輪轂整形、底部欠失である。黒褐色の色調で、胎土中に砂粒を含み焼成はやや疎である。D-15区Ⅲ層より出土した。7は、口径12.0cm、器高2.4cmを測る。輪轂整形、底部糸切りである。明褐色の色調を呈し、内面及び口縁部外縁部付近には煤の付着が認められる。胎土はち密で、混物少く焼成は良好である。D-15区Ⅰ層より出土した。8は、口径8.0cm、器高2.7cmを測る。輪轂整形、底部は糸切りである。内外面共に煤が厚く付着し、黒褐色の色調を



第13図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (4)



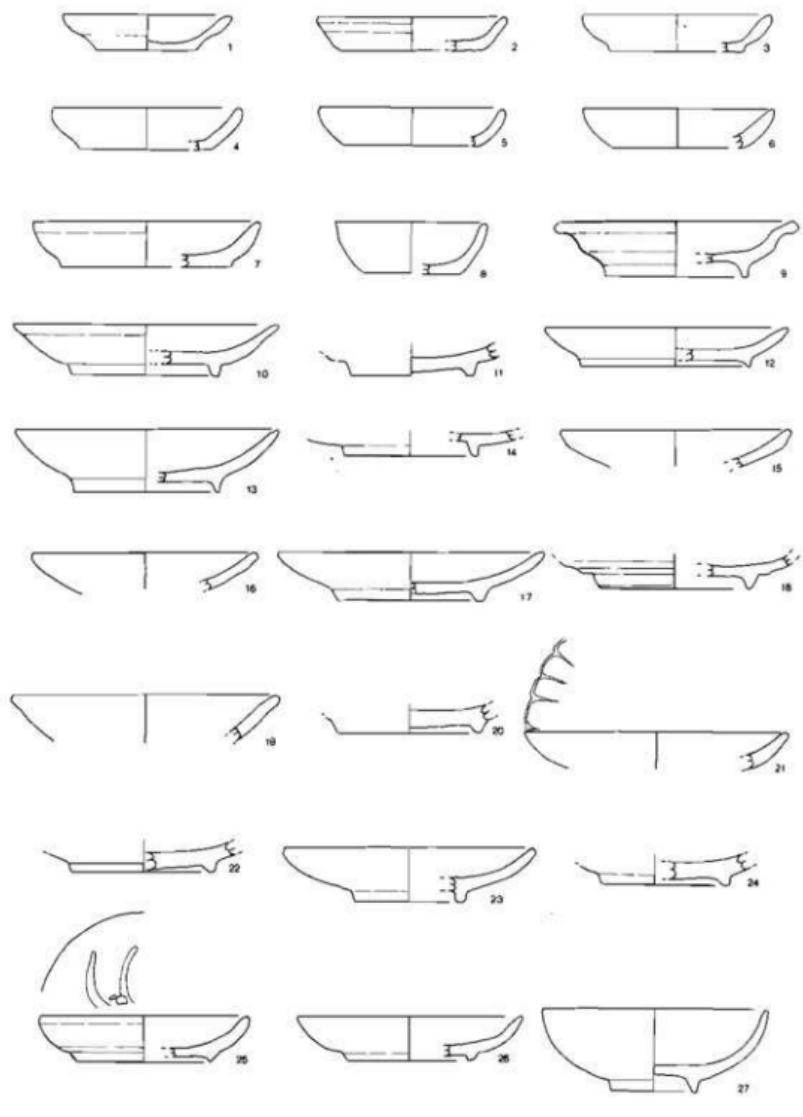
第14図 第1号井戸跡出土遺物実測図 (5)

呈する。人為的に煤を付けた可能性がある。胎土はち密で、焼成は良好である。C-15区Ⅲ層より出土した。

#### ・陶磁器

図（第15図9～27、第16図1～4）

9は、口径12.3cm、器高3.0cmを測る。轆轤整形の後にヘラ整形が施され、貼付高台である。胎土はち密な須恵質で、口縁部及び内面に灰釉がかかる。灰褐色の色調で、焼成良好である。B-15区より出土した。10は、口径14.0cm、器高7.7cmを測る。轆轤整形、貼付高台である。内面には重ね焼きの目痕が残る。褐色釉が分厚く施され、内面は貫入が著しい。胎土はち密で灰褐色から黒褐色の色調を示す。C-15区Ⅲ層より出土した。11は、高台部の破片である。底径6.5cm、残存高1.7cmを測る。底部糸切りの後にヘラ整形。内面に目痕が残る。釉は薄くかけられる。胎土はち密で灰褐色の色調を呈し、焼成は良好である。C-15区Ⅲ層より出土した。12は、口径12.7cm、器高2.0cmを測る。轆轤整形、削り出し高台である。内面には目痕が残る他、底面に小石粒が釉に混ざって付着している。釉がけは内面は丁寧だが、外表面はムラがけで部分的に釉溜がある。赤褐色の色調を呈し、胎土はち密で焼成は良好である。C-13区Ⅰ層より出土した。13は、口径13.8cm、器高3.3cmを測る。轆轤整形、削り出し高台である。灰褐色の色調で、内面に目痕が残る。内面及び外面上部まで褐色釉が薄くかけられる。部分的に貫入があり、混入物は少なく焼成は良好である。B-15区より出土した。14は、底部の破片である。底径7.1cm、残存高1.3cmを測る。内面には菊印花文が浅く刻印され、その上に薄く褐色釉が施される。高台部は造り出しで削りが施される。灰白色の胎土で焼成は良好である。C-15区Ⅱ層より出土した。15は、口径12.0cm、残存高1.9cmを測る。口縁部から腰部までの破片である。灰褐色の色調、轆轤整形後ヘラ整形あり。褐色釉が内面と外面上部にかけられる。胎土はち密で、焼成は良好である。C-15区Ⅱ層より出土した。16は、口径11.7cm、残存高1.9cmを測る。特徴は15と類似点が多い。外面に整形時に削り残した粘土が残る。灰褐色の色調、C-15区Ⅲ層より出土した。17は、口径14.0cm、器高2.6cmを測る。轆轤整形、造り出し高台である。高台部にヘラ痕が多く残る。内面に目痕あり。内面及び外面上半部に褐色釉がかかり、部分的に釉垂れがある。灰褐色の色調を呈する。わずかに貫入が認められる。焼成は良好である。C-15区Ⅰ層よりの出土である。18は、底部破片である。底径8.0cm、残存高2.0cmを測る。内面に目痕が残る。轆轤整形、削り出し高台である。褐色釉がかかり、灰褐色の色調を呈する。胎土はやや疎であるが、焼成は良好である。C-15区Ⅱ層より出土した。19は、口径14.0cm、残存高2.6cmを測る。底部は欠失している。轆轤整形後、横位の整形痕が残る。内外面共に口縁部沿いに白色釉が分厚く施され、貫入が荒く入る。褐色の色調で焼成は良好である。C-15区Ⅲ層より出土した。20は、底部とみの破片である。底径7.5cm、残存高1.6cmを測る。内面に目痕が残る。褐色釉が分厚くかけられ、細かな貫入が入る。灰白色の色調、胎土はやや疎であるが、焼成は良好である。C-15区Ⅰ層より出土した。21は、口径14.0cm、残存高2.0cmを測る。菊皿の破片である。菊花はヘラによる造り出しによる。全体に褐色釉がかかり、貫入が認められる。C-15区Ⅱ層より出土した。22は、底部破片である。底径7.6cm、残存高1.8cmを測る。削り出し高台である。灰褐色の色調を呈し、部分的に還元色（黒色）の部位がある。内面には褐色釉が厚くかかり、全面に貫入が入る。焼成は



第15図 包含層出土遺物実測図 (1)

良好である。B—15区より出土した。23は菊皿である。口径13.0cm、器高2.8cmを測る。外面に指頭圧痕が残る。灰褐色の色調。内面及び口縁部外縁部付近に褐色釉がかかる。貰入が認められ、焼成は良好である。C—15区Ⅱ層より出土した。24は、底部破片である。底径6.8cm、残存高1.7cmを測る。橢円整形、削り出し高台である。内面に褐色釉が厚くかかり、全面に貰入が入る。灰褐色の色調で焼成は良好である。C—15区Ⅰ層より出土した。25は、口径11.5cm、器高2.5cmを測る。橢円整形、鉄釉で絵付し、さらに褐色釉がかかる。灰褐色の色調、焼成は良好である。C—15区Ⅲ層より出土。26は、口径11.7cm、器高2.4cmを測る。橢円整形である。内外面に白色釉が分厚くかかる。灰褐色の色調で、焼成は良好。C—15区Ⅱ層より出土した。27は、口径12.0cm、器高4.4cmを測る。丁寧な橢円整形が施される。内外面に透明度の高い褐色釉がかけられる。全面に細かな貰入が入る。灰白色の色調で、焼成は良好である。C—15区Ⅱ層よりの出土。第16図の1は、口径14.0cm、残存高2.8cmを測る。底部は欠失である。全面に透明度の高い褐色釉が施される。細かい貰入が良く発達している。胎土は、灰白色の色調でち密、焼成は良好である。2は、口径12.0cm、器高3.3cmを測る。橢円整形の後、ヘラ整形が施される。内外面に灰釉がかかる。胎土は灰褐色の色調で焼成は良好である。3は、口径11.7cm、器高4.1cmを測る。染付皿である。内面中央に五弁花文が描かれる他、内外に草花文が描かれる。藍色は淡い発色である。胎土は灰褐色の色調でち密である。高台裏には判読不明の銘が刻される。高台疊付部分には砂粒が付着する。釉は透明度が高い。4は、口径12.0cm、器高2.1cmを測る。C—13区Ⅰ層より出土した。内面には墨絵により「似脹花井落水」との一文が認められる。藍色の発色は濃い。胎土は灰白色でち密である。

#### 灯明皿（第16図5・6）

2点の出土である。いずれも2分の1周程度の破片である。5は、口径9.3cm、器高2.2cmを測る。器面には濃い茶褐色釉が施される。胎土は灰褐色の色調を示し、ち密で焼成は良好である。6も5と同様に茶褐色釉がかかる。口径9.7cmを測り、底部は欠失している。胎土は灰褐色の色調を呈し、焼成は良好である。

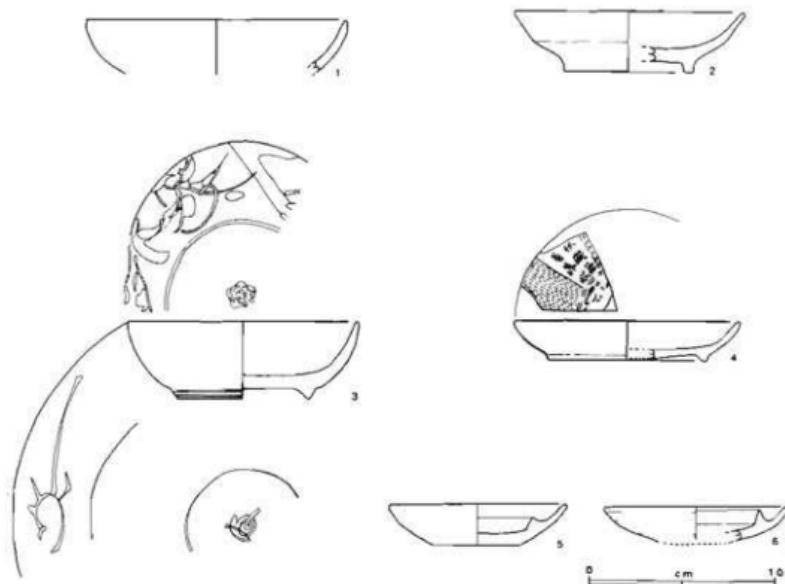
#### 天目茶碗（第17図1～8）

1～8はいずれも天目茶碗である。1は、口径12.0cm、残存高5.4cm、器厚6mmを測る。口縁部はやや外反する。腰部までの破片である。全面に黒色の強い鉄釉がかけられ、非常に良く硅質化している。器面に釉溜りが残る。胎土は灰褐色の色調を示し、非常にち密である。焼成は良好。2は、口径11.4cm、残存高4.4cm、器厚5mmを測る。口縁部小破片である。腰部から緩やかに立ち上がりっている。器面には、黒色の強い鉄釉がかかる。釉はよく硅質化している。胎土は灰褐色の色調で、焼成は良好である。3は、口径12.0、残存高6.1cm、器厚7mmを測る。器形は、腰部から緩やかに立ち上がり、頸部からはほぼ垂直になり口縁部は外反する。器面には茶褐色鉄釉が厚くかけられ、釉溜りが残る。内外面共に貰入が発達している。灰褐色の色調。ち密な胎土で、焼成は良好である。4は、口径12.0cm、残存高5.9cm、器厚7mmを測る口縁部破片である。やや肉厚で、口縁部は外反する。器内外面には黒色の強い鉄釉が施される。釉はよく硅質化している。胎土は、灰褐色の色調でち密であり、焼成も良好である。5は、口径10.0cm、残存高4.6cm、器厚5mmを測る口縁部破片である。頸部の立ち上がりは短く、口縁部は外反している。全面に茶褐色の鉄釉が施される。釉の

表面は梨地肌である。胎土は灰褐色の色調で、焼成は良好である。6は、口径12.0cm、残存高3.7cm、器厚6mmを測る。梨地肌である。黄色がかった鉄釉がかかる。胎土は明褐色の色調を呈し、ち密である。焼成は良好。7は、口径12.0cm、残存高4.0cm、器厚6mmを測る。6と同様の釉が施される。特徴は6と類似する。8は、天目茶碗の高台部の破片である。付高台で、接合部からきれいにはずれている。高台部自体は削り出しで、内面には黒色味の強い鉄釉がかかる。胎土は、灰褐色の色調を示し、ち密で焼成は良好である。

#### 茶碗（第17図9～12、14～20）

9は、口径10.0cm、器高6.7cm、器厚5mmを測る。橢円整形、削り出し高台である。器形はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は円頭状である。器内外面には茶褐色釉が薄くかけられる。胎土は灰褐色の色調を呈し、焼成は良好である。10は、口径11.0cm、残存高5.2cm、器厚5mmを測る。器形はほぼ垂直に立ち上がる。器面には透明度の高い茶褐色釉がかけられる。胎土は明褐色の色調を呈し、ち密で焼成は良好である。11は、口径10.0cm、残存高4.2cm、器厚5mmを測る。外面には橢円整形痕が残る。器面には褐色釉が施された後に、外面に茶褐色釉がかけられ、全面に貫入が発達している。胎土は灰褐色の色調を示し、焼成は良好である。12は、高台部から下半部にかけての破片である。底径5.6cm、残存高3.7cm、器厚4mmを測る。橢円整形、削り出し高台である。全面に緑色味の



第16図 包含層出土遺物実測図 (2)

強い茶褐色釉が高台裏以外に施される。胎土は褐色で、ち密であり焼成は良好である。14は、口径9.8cm、器高7.0cm、器厚5mmを測る。小振りで高めの高台部を持ち、ほぼ垂直に立ち上がる器形である。全体に透明度の高い褐色釉がかかり、貫入がよく発達する。灰褐色の色調を示し、ち密な胎土である。15は、底径4.3cm、残存高5.6cm、器厚5mmを測る。底部近くは緩やかに、上部はほぼ垂直に立ち上がる器形を呈する。全面に透明度の高い褐色釉がかかり、細かな貫入が入る。明褐色の色調を呈し、ち密な胎土である。16は、底径5.0cm、残存高3.2cm、器厚5mmを測る。輪轂整形、削り出し高台である。高台部を除く全面に透明度の高い褐色釉がかかり、細かな貫入が発達している。胎土は、明褐色の色調を呈し焼成は良好である。17は、口径8.6cm、器高6.0cm、器厚6mmを測る。輪轂整形、削り出し高台である。器面にはよく硅質化した透明度の高い褐色釉がかかり、細かな貫入が発達する。胎土は明褐色の色調で焼成は良好である。18は、底部破片である。底径4.6cm、残存高2.8cm、器厚6mmを測る。輪轂整形、削り出し高台である。他のものに較べ高台部が低く、肉も薄い。高台裏にヘラ痕が残る。器面には透明度の高い草色釉がかけられ、貫入が発達し、釉溜りも周囲にみられる。胎土は灰褐色の色調を示し、焼成は良好である。19は、口径10.0cm、残存高7.0cm、器厚3mmを測る。薄手の茶碗である。輪轂整形である。緑色釉で草化文が描かれ、その上に透明度の高い白色に近い褐色釉がかかる。釉はよく硅質化し、貫入が入る。20は、白無地の茶碗である。瀬戸産であろう。口径7.7cm、器高5.0cm、器厚5mmを測る。上薬は、薄く均一にかかっている。胎土は、薄い灰褐色の色調を呈し、焼成は良好である。

#### 番炉（第17図13）

第17図13は、口径10.5cm、器高5.4cm、器厚5mmを測る。底部は欠失している。内外面に緑味の茶褐色釉がかけられるが、底部にはまわらない。器面には削りで、花文が彫られている。口縁部はやや内削ぎの角頭状である。胎土は、灰褐色の色調で白色粒子をわずかに含む。焼成は良好である。

#### 盃（第17図21）

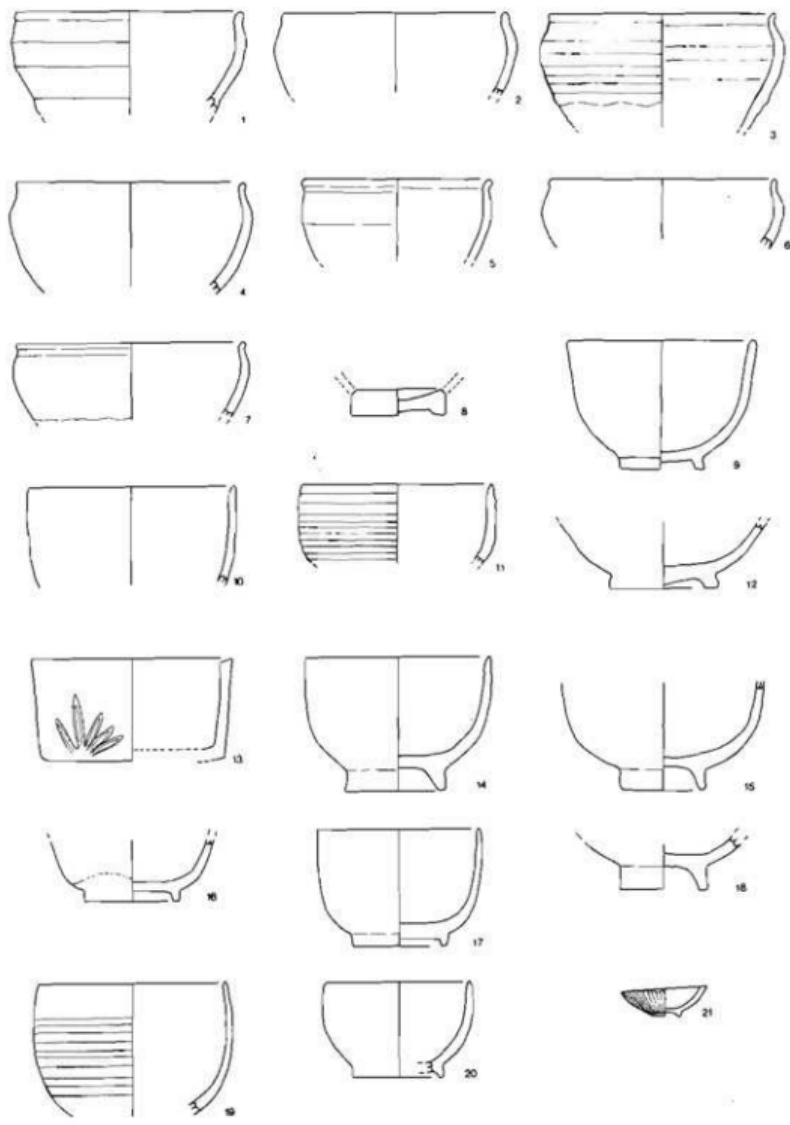
型押しで作られた小型の盃である。口径4.5cm、器高1.5cm、器厚3mmを測る。内面及び口縁部外縁部に、やや青味がかった白色釉がかかる。器面は菊花文の浮彫りである。

#### 徳利（第19図2・4）

いずれも底部の小破片であるが、器形から判断した。どちらも薄手の作りである。2は、底径7.3cm、器厚3mmを測る。器面には底部を除き透明度の高い灰釉が施され、細かな貫入が発達している。胎土は灰褐色の色調で焼成は良好である。4も小破片である。底径6.5cm、器厚3mmを測る。底面以外には白色味の強い灰釉がかけられる。胎土は灰白色でち密である。焼成は良好。

#### 甕（第18図1～6、第19図1）

全部で7点の出土であるが、第19図の1を除いていずれも口縁部の小破片である。やや強引に復元実測している。1は、推定口径36.0cmを測る。口縁部は内湾し、折りかえし口縁である。全面に透明度の高い褐色釉がかけられ、全面に荒い貫入が入る。胎土は灰白色で、やや軟質である。2は、推定口径32.0cmを測る。口縁部は内湾し、折りかえし口縁である。器面には褐色釉がかかる。胎土は灰褐色の色調を呈し、黒色粒子をわずかに含む。焼成は良好である。3は、頭部の立ち上がりが



第17図 包含層出土遺物実測図 (3)

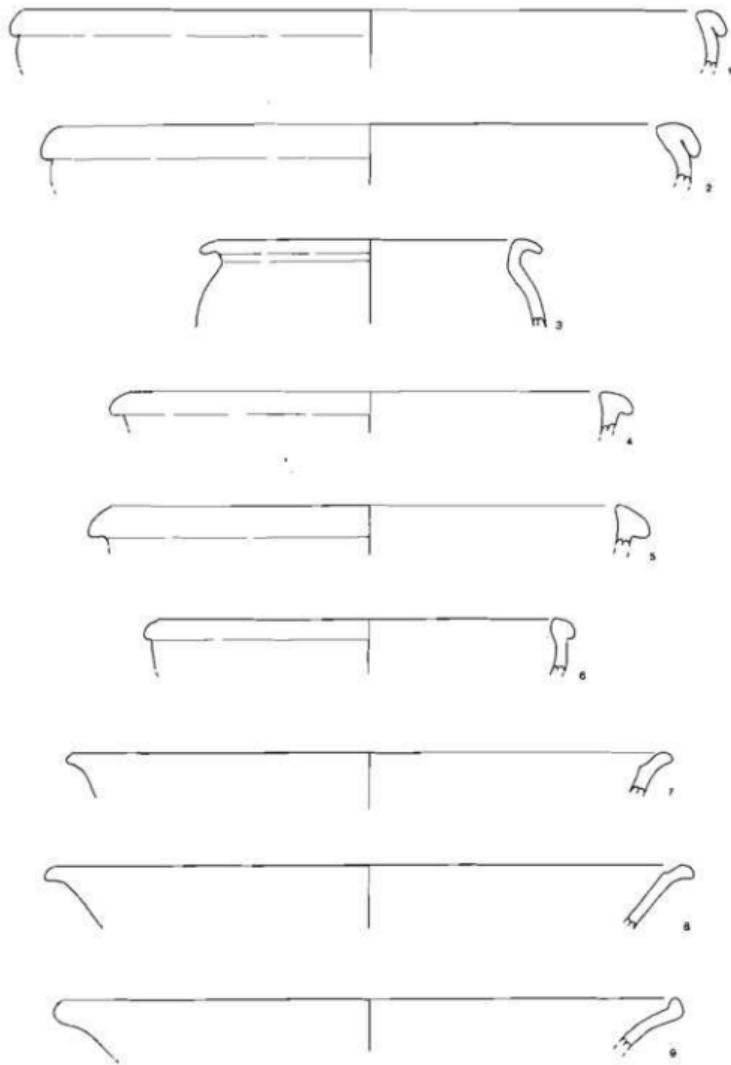
残る。口縁部は大きく外反する。推定口径16.0cmを測る。器面には全面に鉄軸がかかる。胎土は灰褐色の色調を呈し、白色粒子を含む。4は、推定口径25.0cmを測る。口縁部は折りかえし口縁である。器面は緑色味の強い褐色釉がかけられ、貫入が発達する。胎土は灰白色でやや軟質である。5は、推定口径27.0cmを測る。折りかえし口縁である。器面には緑色味の強い褐色釉が分厚くかけられる。全面に貫入が入る。胎土は灰白色の色調で、軟質である。焼成は良好である。6は、推定口径21.0cmを測る。口縁部は折りかえし口縁である。透明度の高い褐色釉がかかり、貫入が発達している。灰白色的色調で軟質の胎土である。第19図の1は、鉄軸のかけられる甕の胴部破片である。機轆整形痕が残る。胎土は、灰白色的色調を呈し焼成は良好である。

#### 鉢（第18図7～9）

3点の出土である。甕と同様に口縁部破片から復元実測している。7は、推定口径31.0cm、器厚7mmを測る。朝顔形の器形で、口縁部はやや外反する。器面には褐色釉がかけられる。胎土は、明褐色の色調を呈し、焼成は良好である。8は、推定口径33.0cmを測る。朝顔形の器形で口縁部は外反する。7と同様に褐色釉かかる。胎土は明褐色の色調を呈し、焼成は良好である。9は、推定口径32.0cmを測る。朝顔形の器形で、口縁部はやや内傾している。器面には透明度の高い褐色釉がかけられ、全体に貫入が入る。胎土は明褐色の色調で、焼成は良好である。

#### 内耳土器（培培）（第20～23図）

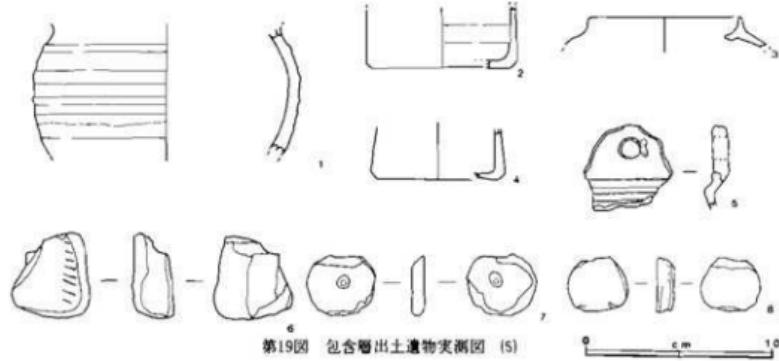
总数で26点の出土である。破片はいずれも小破片であり、やや強引に復元している。立ち上がりが浅いものと、深いものの二種に大別できる。1～6は浅いものである。1は、推定口径42.5cm、器高2.4cm、器厚5mmを測る。口縁部は円頭状を呈する。外面には煤の付着が認められる。指押えによる整形で、上半部は横方向のナデが施される。胎土は明褐色の色調で、混入物は少なく、焼成は良好である。2は、推定口径41.0cm、器高2.5cm、器厚15mmを測る。指押えによる整形で、器面には横方向の整形痕が残る。口縁部は円頭状を呈する。煤の付着が認められる。胎土は、混入物少なく、橙褐色の色調で焼成は良好である。3は、推定口径43.0cm、器高2.5cm、器厚14mmを測る。口縁部は円頭状である。整形は指押えにより上半部には横方向のナデ整形が施される。器面には煤の付着が認められる。胎土は橙褐色で、混入物少なく焼成は良好である。4は、推定口径40.0cm、器高2.4cm、器厚17mmを測る。口縁部は円頭状で、指押えによる整形である。器面には煤が付着する。明褐色の色調を呈し、焼成は良好である。5は、推定口径35.5cm、器高2.7cm、器厚12mmを測る。整形は指押えにより、横方向の整形痕が残る。口縁部は円頭状である。明褐色の色調で煤の付着が認められ、焼成は良好である。6は、内耳部を持つ。推定口径43.0cm、器高3.1cm、器厚11mmを測る。整形は指押えで整形痕が残る。口縁部は円頭状である。内耳は断面板状で、口縁部内縁から横長に形作られている。器面には煤が付着し、胎土は橙褐色の色調を呈し焼成は良好である。7は底部が欠失している。内耳の剥離痕が認められる。整形は指押えによる。器面には煤の付着が著しい。胎土は赤褐色の色調を呈し、混入物は少なく焼成は良好である。8は、推定口径42.0cm、器高5.7cm、器厚11mmを測る。指押えによる整形である。器面は荒れている。粘土帯の接合痕が残り、煤が付着している。褐色の色調で、焼成は良好である。9は、推定口径36.0cm、器高5.6cm、器厚8mmを測る。口縁部は角頭状を呈し、指押えによる整形。器面上半部には横方向の整形痕が残る。煤が多量に付



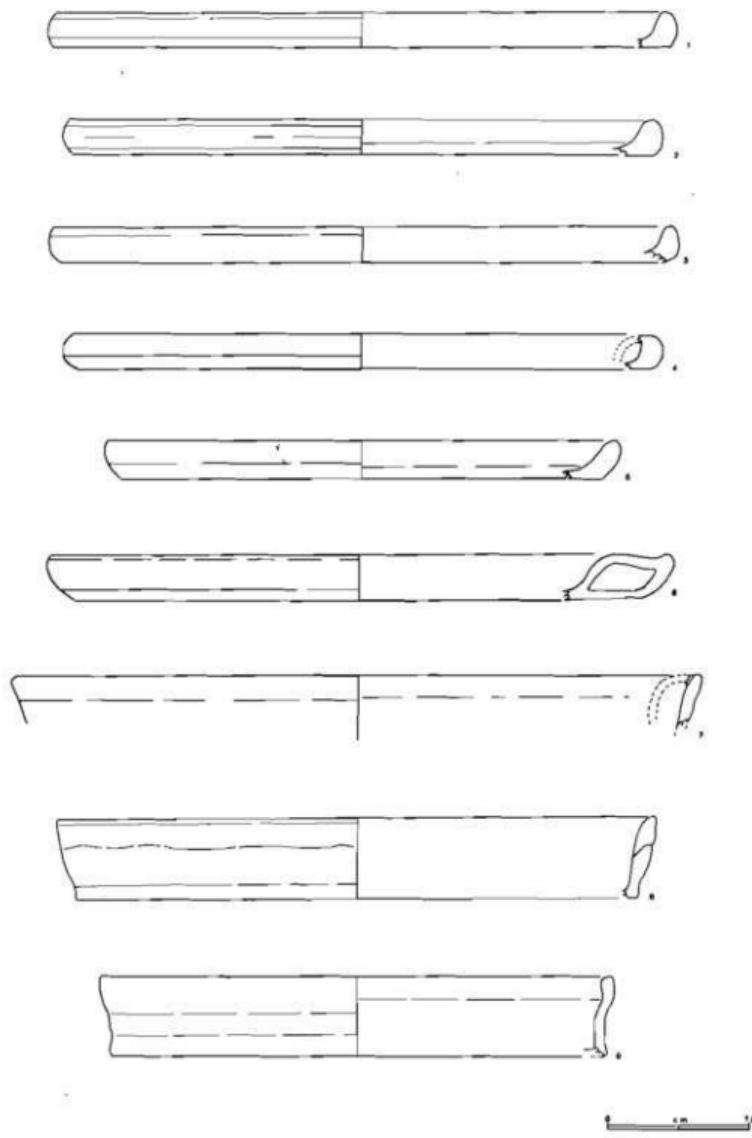
0 cm 10

第18図 包含層出土遺物実測図 (4)

着している。褐色の色調で焼成で良好である。第21図の1は、推定口径42.0cm、残存高3.8cm、器厚10mmを測る。指押えによる整形で、横方向の整形痕が残る。器面には煤が付着する。灰白色の色調を呈し、軟質の胎土である。混入物は少なく焼成は良好である。2は、推定口径40.0cm、残存高4.0cm、器厚8mmを測る。整形は指押えにより、上半部には横方向のナデ整形が施される。口縁部は円頭状である。胎土は灰褐色で焼成は良好である。内面には、内耳の接合痕が残り、形態は板状である。3は、推定口径48.0cm、残存高4.0cm、器厚11mmを測る。口縁部は角頭状である。整形は指押えにより、煤の付着が著しい。器面には接合痕が残る。内耳の接合痕は板状である。黒褐色の色調で、焼成は良好である。4は、推定口径35.5cm、残存高5.3cm、器厚10mmを測る。煤の付着は認められない。褐色の色調で、混入物は少なく焼成は良好である。5は、推定口径40.0cm、残存高4.2cm、器厚11mmを測る。指押えによる整形である。口縁部は角頭状を呈する。底部は欠失している。煤の付着が著しい。黒褐色の色調を呈し、混入物は少なく焼成は良好である。6は、推定口径50.0cm、器高5.1cm、器厚8mmを測る。指押えによる整形で、横方向の整形痕が残る。口縁部は円頭状である。煤の付着が著しい。黒褐色の色調を呈し、焼成は良好である。7は、推定口径24.0cm、器高6.0cm、器厚11mmを測る。指押えによる整形で、横方向の整形痕が残る。煤の付着は著しい。黒褐色の色調を呈し、混入物は少なく焼成は良好である。8は、推定口径44.5cm、器高5.4cm、器厚7mmを測る。整形は指押えにより、口縁部は角頭状を呈する。内面には内耳の接合痕が残り、断面は板状である。煤の付着が著しい。褐色の色調を呈し、焼成は良好である。第22図の1は推定口径27.5cm、器高5.5cm、器厚7mmを測る。指押えによる整形であり、器面には横方向の整形痕が残り、煤の付着が著しい。褐色の色調を示し、混入物も少なく焼成も良好である。2は、推定口径47.5cm、器高5.7cm、器厚7mmを測る。口縁部は角頭状であり、煤の付着が著しい。整形は指押えで、横方向の整形痕が残る。褐色の色調を呈し、焼成は良好である。3は、推定口径40.0cm、残存高4.4cm、器厚8mmを測る。指押えによる整形で、煤の付着が著しい。口縁部は角頭状を呈する。褐色の色調で、焼成は良好である。4は、推定口径43.0cm、残存高4.5cm、器厚10mmを測る。口縁部は角頭状で、器面には煤の付着が認められない。灰褐色の色調で、混入物は少なく焼成は良好である。5は、底部から下半部にかけての破片である。底径35.5cm、残存高5.2cm、器厚8mmを測る。破片上端部は接合部が剥離し



第19図 包含層出土遺物実測図 (5)



第20圖 包含着出土遺物実測図 (6)

た面である。煤の付着が著しい。褐色の色調で、混入物は少なく焼成は良好である。6は、内耳部の破片である。推定口径は40.0cmを内耳は断面板状で、煤の付着は認められない。灰褐色の色調で、焼成は良好である。7も底部破片である。底径38.0cm、残存高3.0cm、器厚8mmを測る。内面に内耳の接合痕が残る。褐色の色調を呈し、混入物少なく焼成は良好である。8は、底部破片である。推定口径32.0cm、残存高3.5cm、器厚7mmを測る。整形は指押えによる。横方向の整形痕が残る。器面には煤の付着が著しい。褐色の色調を示す。7も底部破片である。推定底径21.5cm、残存高3.2cm、器厚7mmを測る。煤の付着が著しい。褐色の色調で、混入物少なく焼成は良好である。

第24図は内耳部分の破片である。4点の出土である。いずれも小破片である。形態は、板状の内耳の両側面から押圧を加え、外周中央に浅い溝が形成される。1・3は灰褐色、2・4は暗灰色の色調を示す。いずれも焼成は良好である。

#### 擂鉢（第24図、図版）

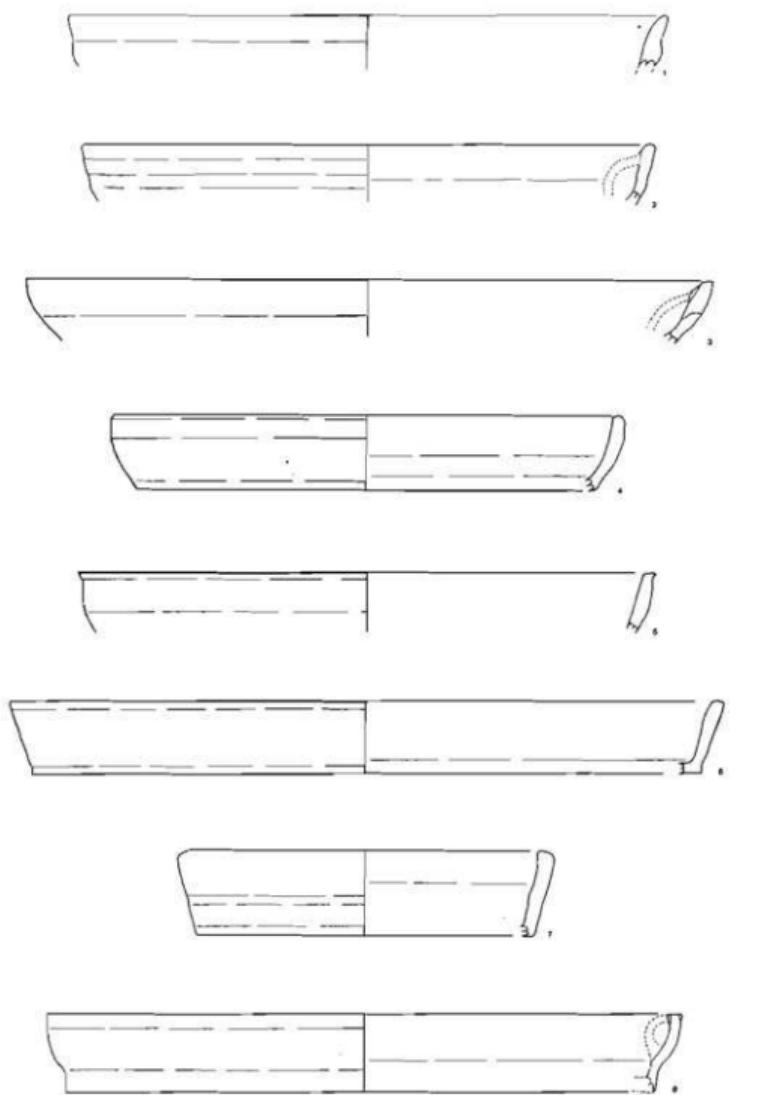
いずれもC-13～C-15区にかけて出土している。いずれも部分破片で全体を伺うことのできるものは無い。

1は胴部破片である。C-15区Ⅰ層より出土した。縦轆痕が残り、赤褐色の色調である。櫛目は一単位5本である。胎土はち密で、混入物は少なく焼成は良好である。器厚10mmを測る。2は胴下半部の破片である。C-15区Ⅲ層より出土した。指頭による圧痕が残り、その後内外面共に刷毛目状の横位の整形痕が残る。褐色の色調を呈し、櫛目は一単位6本以上である。胎土はち密で砂粒を含む。焼成は良好である。器厚10mmを測る。3は胴部破片である。C-15区Ⅱ層より出土した。縦轆整形後内外面共に刷毛目状の横位の整形痕が残る。褐色の色調で、櫛目は一単位6本である。胎土は砂粒の混入が多く荒い。焼成は良好である。器厚11mmを測る。4は胴部破片である。C-13区Ⅰ層より出土した。前の2点と同様に縦轆整形後の整形が施される。色調は赤褐色で櫛目は一単位6本以上である。胎土はち密で石英の混入が多い。焼成は良好で内面に鉄軸がかかる。器厚11mmを測る。5は胴部破片である。C-15区Ⅱ層より出土した。明褐色の色調で、櫛目は一単位6本である。胎土は石英の混入が多く粗い。焼成は良好である。器厚11mmを測る。6は胴部破片である。C-15区Ⅰ層より出土した。内面に斜めの整形痕。外面には指頭圧痕が残る。褐色の色調を呈する。櫛目は一単位6本である。胎土は砂粒の混入多く荒い。焼成は良好である。器厚11mmを測る。7は胴下半部の破片である。内外面共に縦轆整形痕が残る。内外面共に鉄軸がかかり茶褐色の色調である。櫛目は一単位9本である。胎土はち密で混入物少なく、焼成は良好である。器厚9mmを測る。8は胴下半部の破片である。C-15区Ⅲ層より出土した。口縁部に近い部位と思われる。内外面共に縦轆整形痕が残り、鉄軸がかかる。茶褐色の色調である。櫛目は一単位8本以上である。胎土はち密で混入物少なく、焼成は良好である。7と類似しており同一個体の可能性がある。器厚8mmを測る。

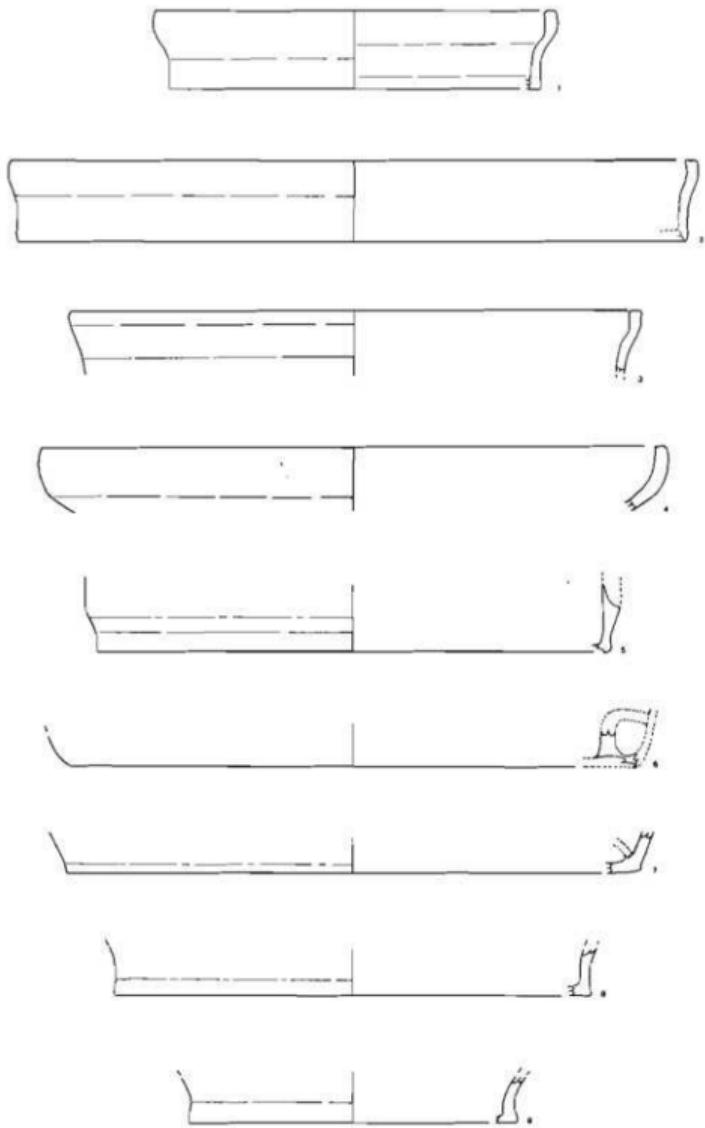
#### 石器（第25図～27図）

今回の調査で出土した石器は、打製石斧6点、磨石6点、石臼1点、石砥5点の計18点が出土している。

第25図の1～6は打製石斧である。1は、D-7区Ⅱ層より出土した。先端部の一部及び基部が



第21図 包含層出土遺物実測図 (7)



第22圖 包含層出土遺物實測圖 (8)

— 41 —

欠損する。残存長11.5cm、幅6.0cm、厚さ3.0cmを測る。重量は195gである。片側自然面の湾曲した縦長の破片を使用している。硬砂岩製である。2は、C—6区Ⅰ層より出土した。分銅型の石斧である。くびれ部より破断している。長さ11.5cm、幅6.0cm、厚さ2.0cmを測り、重量は140gである。粘板岩？製で、全面風化が著しい。刃部の調整は大雑把である。3は、基部が欠損している。C—4区Ⅱ層より出土した。残存長10.5cm、幅6.5cm、厚さ2.5cmを測り、重量は157gである。硬砂岩製で、刃部には敲打痕が残る。4は、片側自然面が残る薄手の作りである。C—15区Ⅱ層より出土した。長さ7.0cm、幅6.9cm、厚さ1.0cmを測り、重量は65gである。粘板岩製で、刃部は、片側からの調整が施されている。5は、片側自然面が残る分銅型の打製石斧である。両端部共欠損しており、刃部は部分的にしか残っていない。残存長12.2cm、幅9.5cm、厚さ2.5cmを測り、重量は315gと大型である。硬砂岩製である。6は、大型である。D—12区Ⅰ層より出土している。片側に自然面が残る。長さ15.5cm、幅13.3cm、厚さ4.5cmを測り、重量は910gである。砂岩製で全面にバティナが付着している。

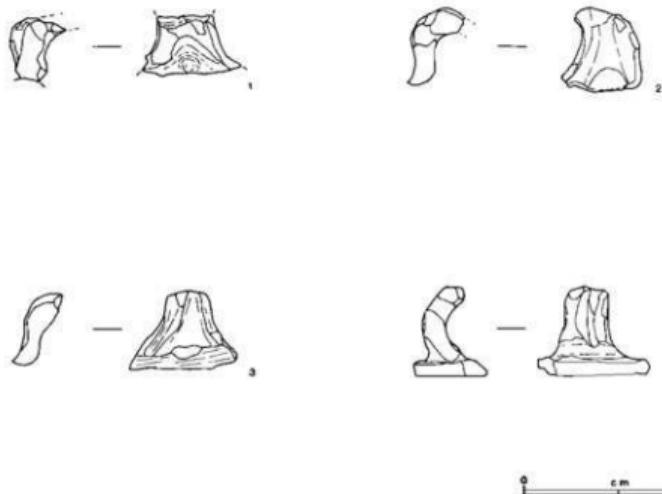
第26図1～4、第24図1・2は磨石である。1は、花崗岩製である。4分の1周程の破片である。側縁部に敲打痕が残る。長さ11.0cm、幅9.0cm、厚さ5.5cmを測り、重量570gである。2は、下端部が欠損している。片岩系の石材である。側縁部は磨痕が残る。残存長8.2cm、幅10.7cm、厚さ2.2cmを測り、重量312gである。3は、球状の形態である。D—13区Ⅰ層より出土した。長さ10.3cm、幅10.7cm、厚さ8.5cmを測り、重量1,235gである。石質は花崗岩で、全面に磨痕が残る。側縁部に敲打痕がある。4は、長さ5.4cm、幅4.3cm、厚さ3.5cmを測り、重量120gである。長球形の形状である。硬砂岩製で、全面が丁寧に磨かれている。第27図の1・2は、共に片岩系である。1は、下端部が欠損しているが、残存長22.1cm、幅7.2cm、厚さ3.2cmを測り、重量は765gである。側縁部は丁寧に滑らかに磨かれている。2も下端を欠損している。D—15区Ⅲ層より出土した。側縁中央付近に凹みが2カ所ある。残存長16.1cm、幅5.6cm、厚さ2.2cmを測り、重量は370gである。3は、石臼の破片である。C—15区Ⅲ層より出土した。残存長19.5cm、幅4.0cm、厚さ4.5cmを測り、重量は580gである。石質は多孔質の溶岩と思われる。第27図4～8は砥石である。いずれも黄白色の軟質の泥岩系である。4は、C—15区Ⅲ層より出土した。長さ7.4cm、幅2.7cmを測り、重量は40gである。5は、B—15区より出土した。長さ7.6cm、幅2.6cmを測り、重量は60gである。良く使い込まれており、楔状の形態を示す。6は、C—15区Ⅱ層より出土した。長さ9.4cm、幅4.0cmを測り、重量は102gである。片面のみ良く使用され、その部分は湾曲している。7は、C—13区Ⅰ層より出土した。長さ7.5cm、幅2.6cmを測り、重量は47.5gである。全面共よく使われ、磨耗痕が残る。8は、下端部が欠損している。長さ4.8cm、幅2.5cmを測り、重量35gである。

#### 鉄製品（第28図）

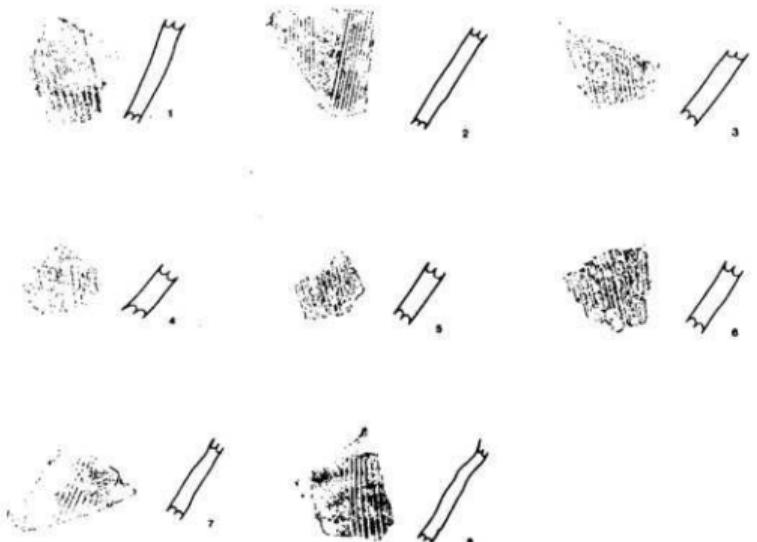
出土鉄製品のうち、図示に耐えるもの16点を図示した。そのうち、用途が明確に判明するものは少ない。

1～3は鎌である。いずれも部分破片で完全なものは無い。1は、先端部が欠損している。D—7区より出土している。残存長11.0cm、最大幅3.0cmを測り、重量は70gである。2は、刃部の部分破片である。残存長6.0cm、最大幅3.0cmを測り、重量は20gである。刃部、側面共に鎔が厚く

かかっている。3も刀部の部分破片である。残存長5.5cm、幅3.0cmを測り、重量は25gである。4は分鋼と思われる。角錐柱で、上部にはつり手が付く。長さ5.5cm、幅3.3cmを測り、重さ150gである。全面に薄く鏽がかかる程度で良好である。5は、鉄製の環である。上部は幅5mm程開いており、完全なループにはなっていない。6は、煙管の雁首部である。火皿部は欠失しているが、全体として良く残っていると言える。全体に緑青が吹いている。残存長4.3cm、直径1.2cmを測り、重量は5gと軽い。7以降は用途を特定することができない。7は、U字状の鉄棒である。長さ10.0cm、直径0.4cmであるが、部分的に鏽でふくれている。重量は24gである。8は、板金状の先端を鉤状にしている。長さ7.5cm、幅2.1cmを測り、重量34gである。比較的鏽は少ない。9も板金でT字状の金具様に整形されている。長さ7.8cm、幅4.3cmを測り、重量28gである。10は、長さ4.2cm、直径0.4cm、重量5gである。11は、長さ6.3cm、直径0.7cmを測る。重量4gである。12は、長さ3.1cm、直径0.6cmを測る。重量4gである。13は、角柱状の形態を示す。長さ12.7cm、直径0.7cmを測る。重量31gである。14も角柱状である。長さ5.4cm、直径0.6cmを測る。重量5gである。15は、長さ4.0cm、直径0.3cmを測る。重量5gである。16は、長さ3.0cm、直径0.2~0.3cmであるが、鏽で大きくふくれている。重量は4gである。

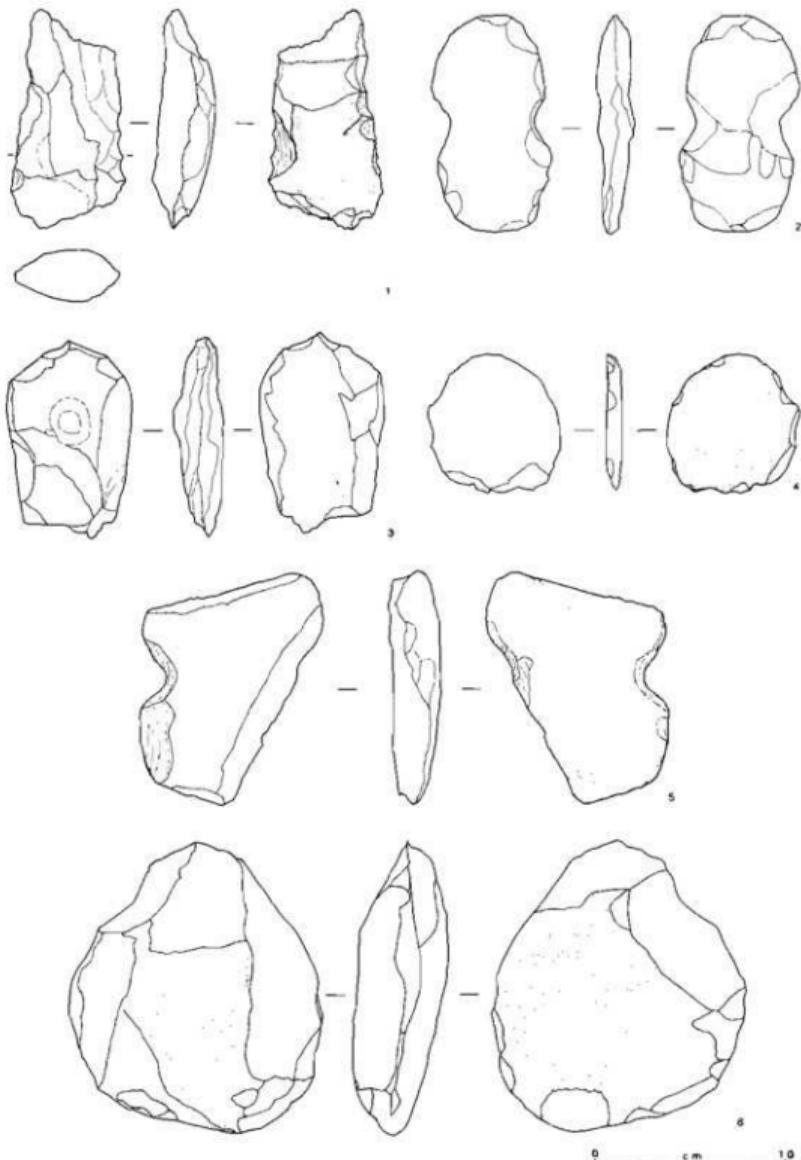


第23図 包含層出土遺物実測図 (9)

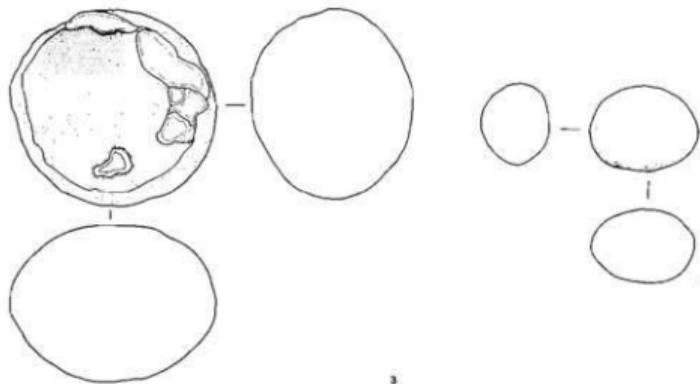
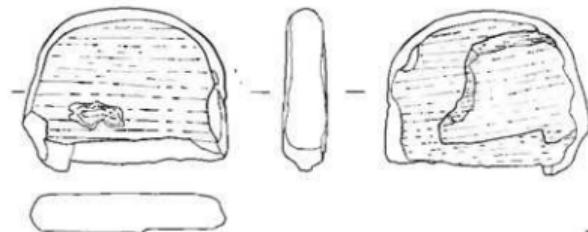
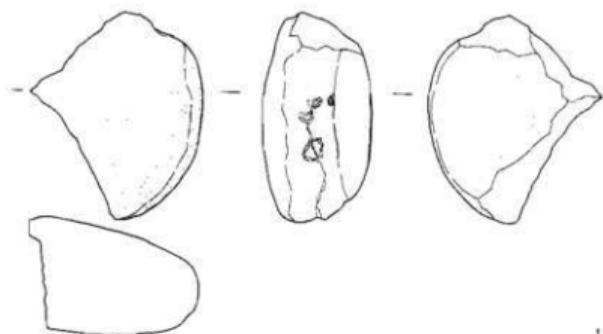


第24図 包含層出土遺物実測図 (a)

0 cm 10

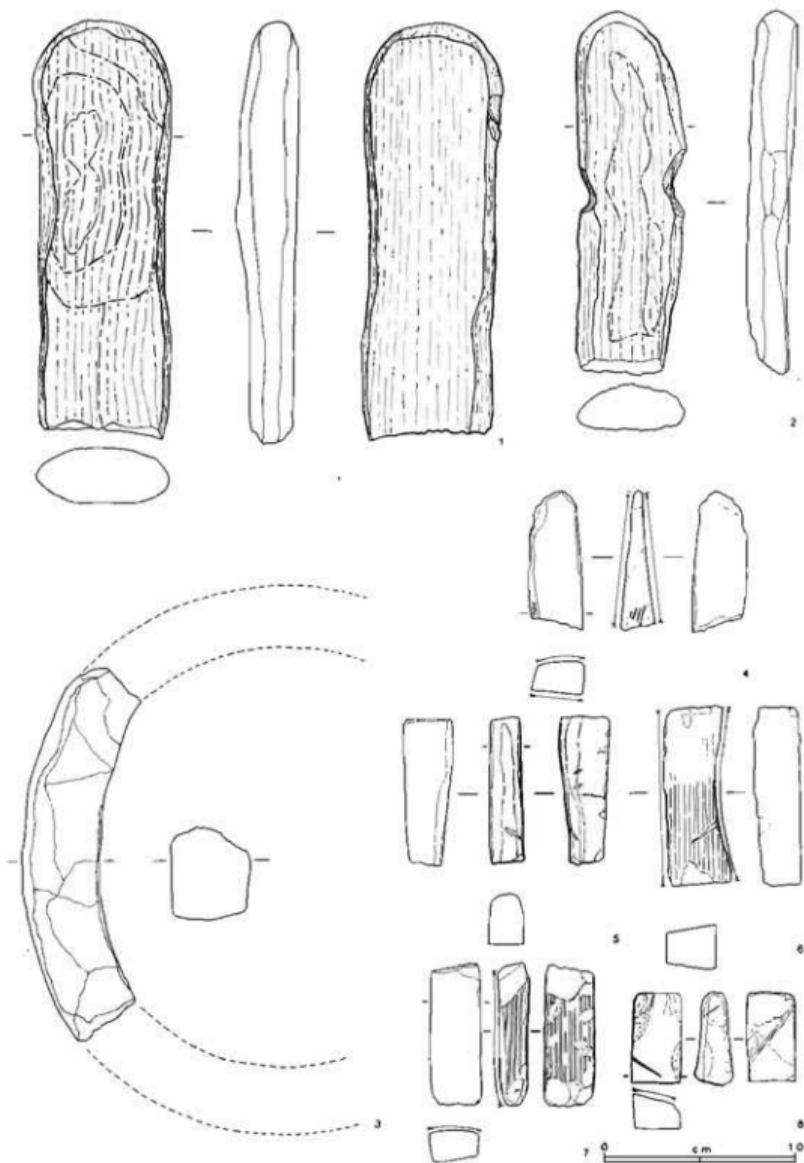


第25図 包含層出土遺物実測図 (1)

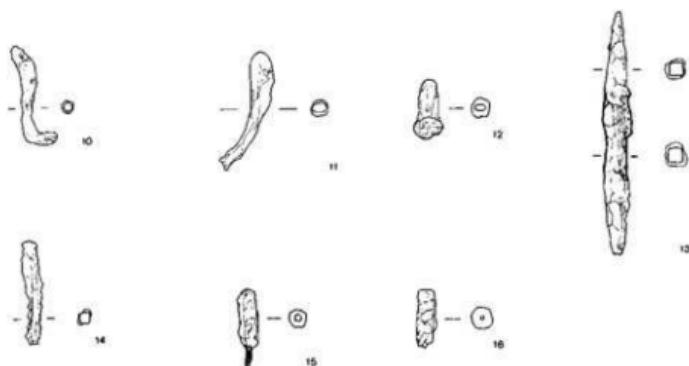
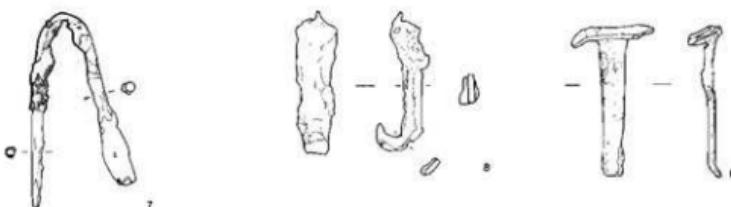
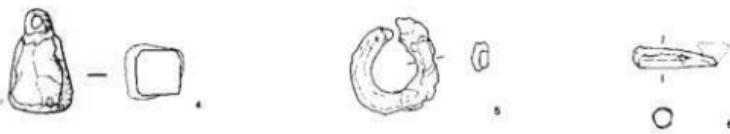
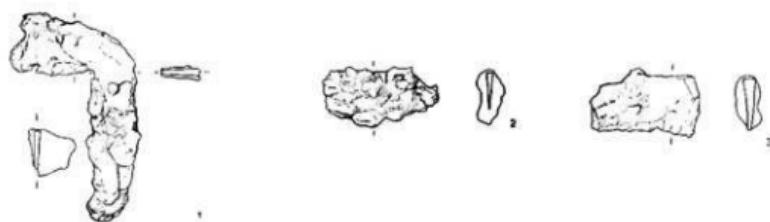


0 cm 10

第26図 包含層出土遺物実測図 (1)



第27图 包含层出土遗物实测图 13



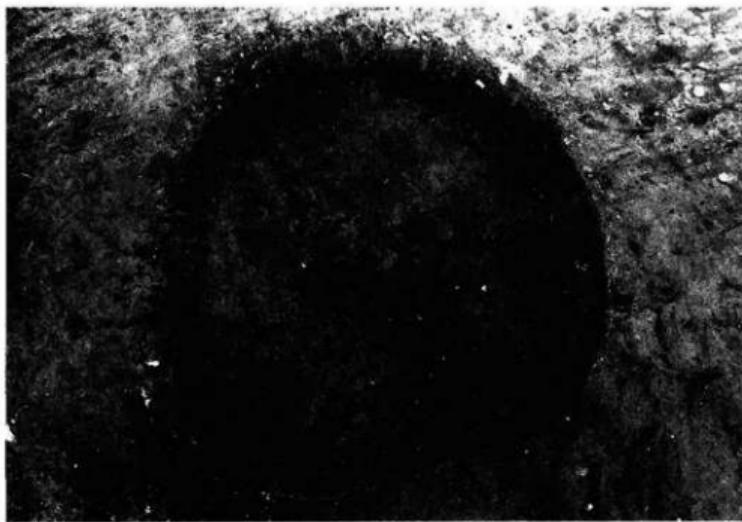
0 cm 10

第28图 包含层出土遗物实测图 (1)

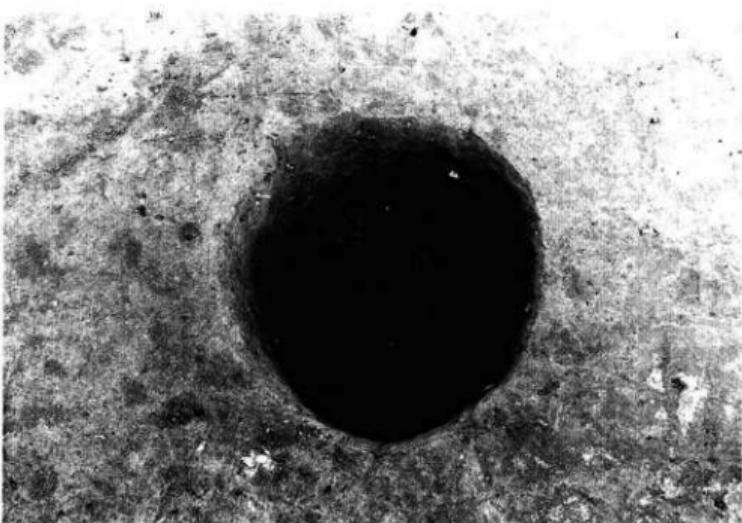
# 写 真 図 版



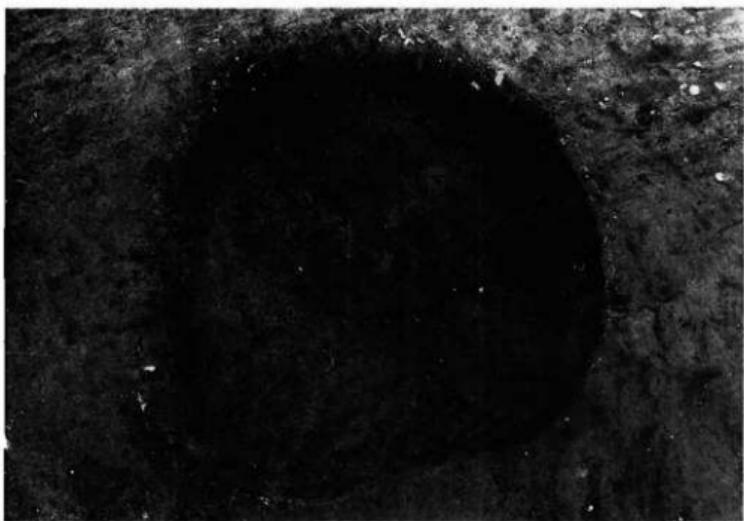
図版 I 道路航空写真（昭和30年撮影）



图版10 第3号土壤完掘状况



图版11 第4号土壤完掘状况



圖版12 第5號土壤完掘狀況



圖版13 第6號土壤完掘狀況



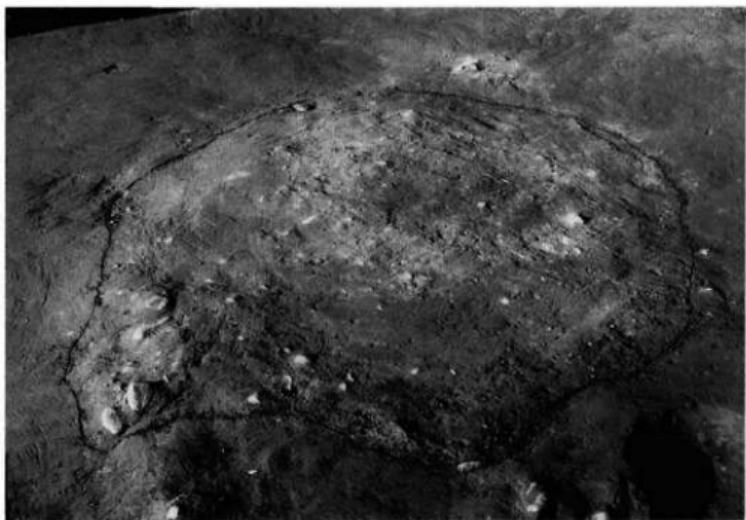
图版14 第7号土壤完掘状况



图版15 第1号沟状遗構完掘状况



图版16 第2号沟状遗構完掘状况



図版17 第1号井戸跡遺構確認状況



図版18 第1号井戸跡断面堆積状況



图版19 第1号井戸跡完掘状况



图版20 第1号住居跡調査風景



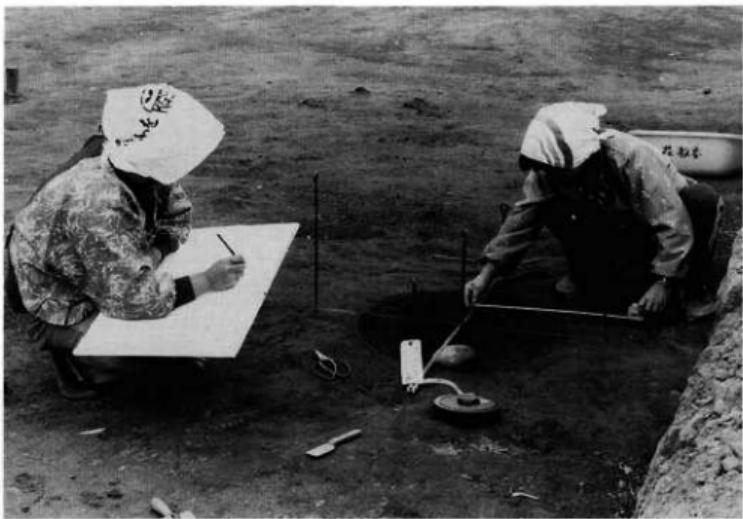
図版2 表土剥ぎ作業状況



図版3 調査区全景



図版21 発掘調査風景



図版22 発掘調査風景



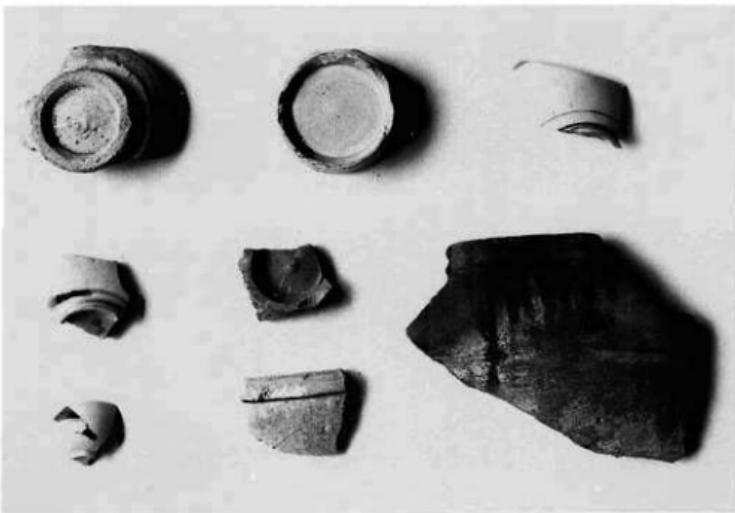
図版23 濃査地点の宝篋印塔



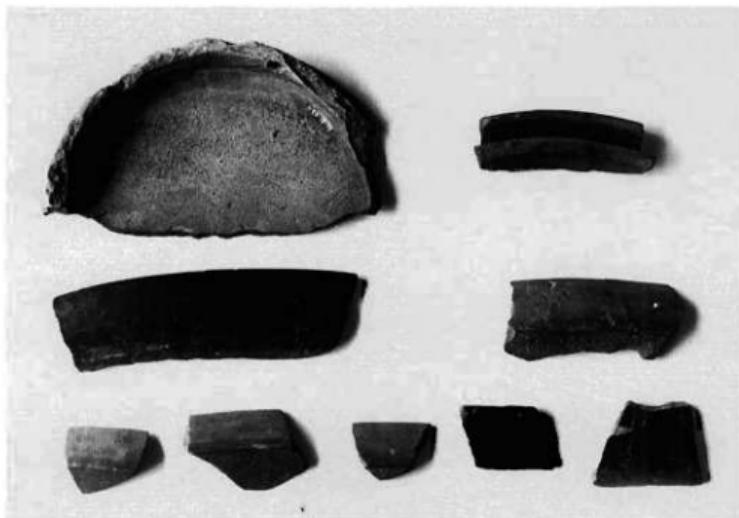
図版24 土塼・溝状造構出土遺物



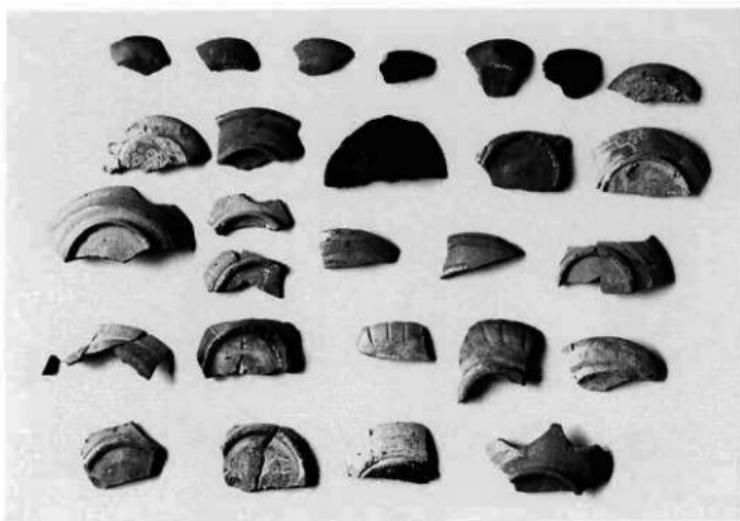
图版25 第1号井戸跡出土遺物



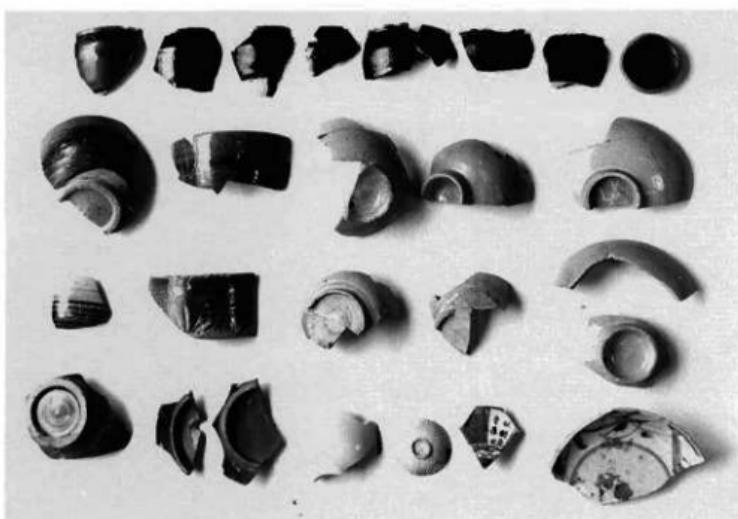
图版26 第1号井戸跡出土遺物



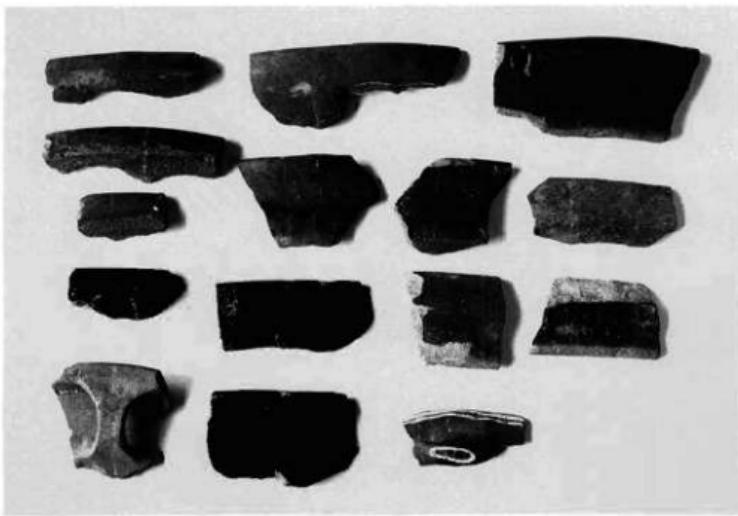
図版27 第1号井戸跡出土遺物



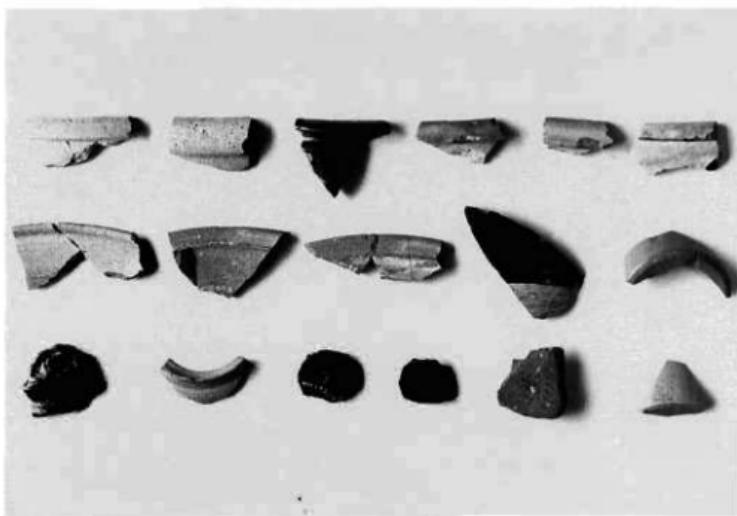
図版28 包含層出土遺物



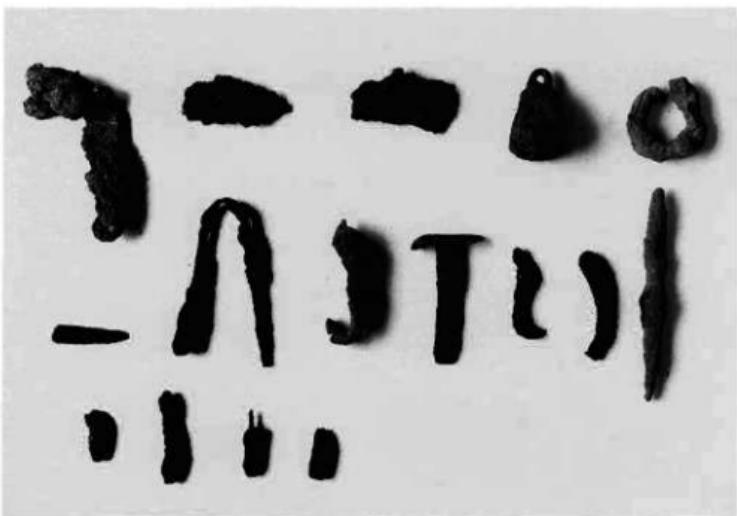
图版29 包含层出土遗物



图版30 包含层出土遗物



图版31 包含层出土遗物



图版32 包含层出土遗物



図版4 調査区北側の調査状況



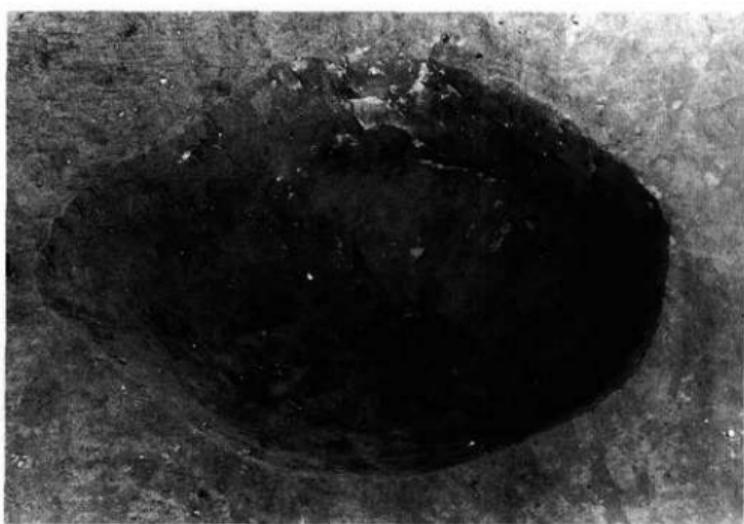
図版5 土層断面状況 (C-3区)



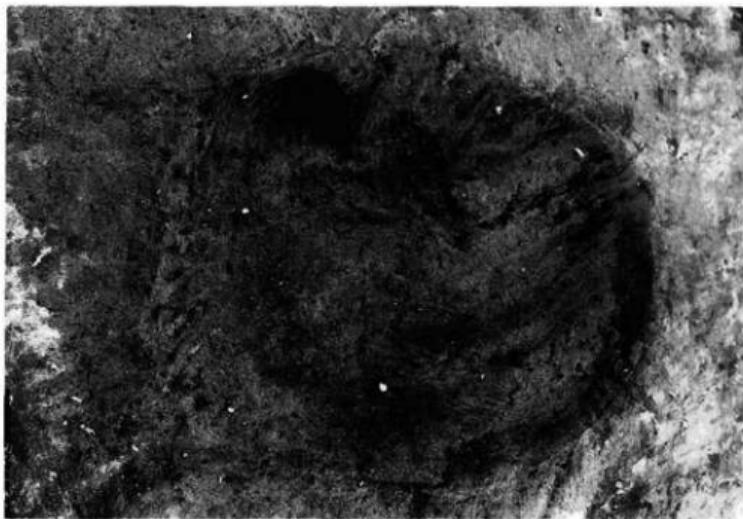
図版6 第1号住居跡完掘状況（東方より）



図版7 第1号住居跡完掘状況（西より）



图版 8 第 1 号土壤完掘状况



图版 9 第 2 号土壤完掘状况

---

花園町遺跡調査会発掘調査報告書第1集

## 花園町 No.50 遺跡

一般県道者谷一寄居線橋梁整備事業  
(花園橋)に伴う埋蔵文化財発掘調査

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月25日 発行

発行 花園町遺跡調査会  
埼玉県大里郡花園町大字小前田2345番地  
印刷 アサヒ印刷株式会社  
電話 (0485) 41-5152

---